知音

土佐犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
知音

【Ｎコード】
Ｎ４２４７Ｋ

【作者名】
土佐犬

【あらすじ】
学園生活の中で、僕らには日々小さな変化が訪れる。それに流されたり、抗ってみたり……そんな僕らの、少しだけ不思議な出会いの話。
初夏の夜に出会った少女は、明治コスプレイヤだった。
※「燕雀」から改名しました。

ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

お題サイト「揺らぎ」様※からいただいたお題で、短編を。知音の序章にもなっています。

「なーあ、俺お前がお前でよかったと思ってるけど、お前も俺が俺でよかったとか思ってくれてる？なあなあ、どうよ、どうなんよ、そこんところ。」

※ｈｔｔｐ：／／ｍ－ｐｅ．ｔｖ／ｕ／ｐａｇｅ．ｐｈｐ？ｕｉｄ＝ｆｌｉｃｋｅｒｓ＆ａｍｐ；ｉｄ＝１＆ａｍｐ；ｇｕｉｄ＝ｏｎ

prologue

「なーあ、なんでお前俺と付き合ってんの？」

あいつは振り向きざまに俺を一瞥して、いう。
「あんたってさ、いつも『なーあ』って呼びかけるよね」
それを言うのなら、お前もいつものごとく質問に答えてくれない。
「だから付き合ってんの？」
「ばっかじゃないの？あたしはどれだけ欲がないのよ」
ばかの「ば」に必要以上に力を入れて吐き捨てるように言うさまは、あまりかわいらしくはない。
「じゃあなんで」
「それ、飯田にも言われた昨日」
いいだいいだ。たしかこいつの隣の席の男子。あんまりうるさくはないけど女子と普通に喋るタイプ。たしか彼女とこないだ別れたらしい。
「なんて答えたのさ」
一瞬、睨まれた。一瞥なんてもんじゃない。すくみあがりそうになった。
「なんだよ？」
「別に。聞きたいの？」
一応、と答える。可愛くない。
「わかんないけど告白されたし、って答えといた。」
さすがにその投げやりな言い方とセリフにいらだちがせりあがってきた。もうにらんではいない目を、思いっきり睨みつける。
「なんだよそれ！そこは俺のいいところをあげるとこだろうが！」
「あんたのいいところってどこよ」
こっちの怒りも睨みも無視してしれっと言う。ああもう、可愛くな

い！

「ところでさ」
古井が話を振ってきたのは三十分後だ。
ちなみにここは俺の部屋で、おれたちは俺のベッドにこしかけたり体を折って寝そべったりして読書にいそしんでいた。古井は文庫本、俺は雑誌。
「陸奥（みちのく）って自分に自信ない方だっけ？」
「何それ。俺は自分に自信ありますけど。」
まあ美形ではないし地味系だけど、見た目は悪かないし、なかなかいいやつだと思うし。因みに客観的意見。
「じゃあなんでそういうこと聞くわけ？」
「べっつにー。なんとなく？」

実は、なんとなくではないのだが。
自分に自信がなになんて、そんな馬鹿な。そんなの人生生きづらいじゃないか。
そりゃあ多少頭は悪かったりもするけど、特出して何か秀でてるわけでもないけれど、別にそこはそこ。目をつぶる。

ただ。
自信がほしいのに、自信がどうしたってもてないこともないわけではない。
たとえば、
この古井っていう可愛くねー女は、
ちゃんと俺のこと好きでいてくれてんのかとかまあそんなところだ。
ここはあんまり目をつぶれないから困る。

「ふーん。ま、どうせあんたのことだから特に考えなんかないんだろうとおもってたけどね」

「…なんでそういうかっわいくない言い方ができるかなあ、お前は」
「惚れたのはあんたでしょう」
「ＯＫしたのはおまえだろ」
「……」
「……」

さらに三十分。
古井は携帯をいじっている。さっきの文庫本は読み終えたらしい。
十分くらい前から携帯に移行したのだが、ずっといじっていて手放さない。数人とメールしているらしい。
料金とか気にしないのかなぁ。
ていうかこいつ、実はけっこうまつげ短いな。面白ー。
でも、何気に髪の毛さらさらだよな、手入れとかちゃんとしてるっぽいし。
黒ぶち眼鏡もなんだかんだ似合ってるし。なんだっけ、こういの、眼鏡美人？
それにしてもなんでこいつはこんなに可愛くないかな。性格が。
うーん、性格というか、言い方が悪い。口が悪い。しかも質問に答えない。なんというか、最悪だな。
うーん…まあ、それでもねえ。
待ち合わせとかは絶対時間どおり来るしな。俺が遅れたら超怒られるけど。
あと、音楽とかの趣味いいんだよね。こいつのオススメの曲はハズレないし。妙にオンナノコオンナノコしたのじゃなくて、いい感じの曲薦めてくれるしなあ。…でも、こないだのカラオケでは結構知らない曲も歌ってたな？……もしかして、選んで薦めてくれてんのかなぁ。
こいつって結構気がきくんだよね。
…だから、その、こいつは口悪いけど、まあ、こいつのままでいいかな、と。

だから、さっきの質問は。
俺でいいの？って。
古井の横顔を見ながら。
なーあ、俺お前がお前でよかったと思ってるけど、お前も俺が俺でよかったとか思ってくれてる？
なあなあ、どうよ、どうなんよ、そこんところ。
胸の内で、つぶやく。

「いつまでこっち見てんの」
「…いつから気付いてたの？」
恐るべし。
「打ちづらいから見んな」
しかも質問に答えない。そして言ってることが非情すぎやしないかい、まいはにー？
「別にいいじゃん」
ちょっと反抗して見続けていると、眉間のしわが険しくなってきた。
おお、怖い。
「てか、誰とメールしてんの？」
「さぁね」
「めーこちゃん？それか前野木（まえのぎ）さんとか？」
「誰でもいいじゃん。何、急に興味もっちゃって」
別に急にでもないのだが。そんなに関心がないとでも思われていたのか。
「急でもないし。てかなに、怒ってる？もしかして」
「怒ってない」
怒ってる怒ってる。
なんだろ。
「……ああ、可愛くないって言ったのは謝るって。ごめんごめん」
「別にそんなことで怒っちゃいないけど？」
「じゃあ何！てかやっぱり怒ってたんじゃん」

人の揚げ足をとるな、と頭をしばかれる。乱暴女め。
「だーかーらー、謝ってんじゃん」
「そんなことじゃないって言ってるでしょ？」
「だって実際怒ってんじゃんか」
それからもう少し押し問答は続いたのだけれど、結局折れた…というか、話題をそらしたのは古井の方だった。
「なに、あたしがメールの相手言わなかったので不満なわけ？」
「そんなんじゃ」
「メールのお相手は飯田ですー。いい？満足？」
可愛くねぇ。つぶやきかけたところで、ふと、飯田？と顔をあげた。
「ちょっとさ、なんで飯田とメールしてんの。メアド知ってたの？いつから？」
「なに、浮気調査？別に、昨日だけど？」
昨日。ああ、なんか聞かれたとか言ってた。
「……っていうかさ、なんで飯田とそんな話してんのさ」
「そんなって知らないでしょう、あんたは」
「メールじゃなくて、なんで俺と付き合ってんのかって話！」
そういうと、古井はようやくこちらをまっすぐ見た。不機嫌さが少し薄れたような気がする。まっすぐ見られて、くっと言葉に詰まる。その間に古井は目をそらした。不機嫌でというよりは、困ったように。
「なんでその話を今更…」
むむ。この反応は。一応付き合って一年以上たっている。こいつの困り顔は、高い確率で照れ隠しのことが多い。
この話を振ってほしかったのか。
……というか、さっき言ったときに反応しなかったから睨まれたのか。
んでもって不機嫌になった、と。
「……」

「ちょっと、聞いてる？聞いてないでしょ。ほかごと考えてるでしょう」
一年以上の付き合いで、バレるところはバレるらしい。
「いやぁ……古井って、案外可愛いなと」
「んなっ」
おお、赤くなってる。可愛いやつめ。
「とにかく、あっち向いててよ！メールそろそろ終わらせるから！」
「えーやだー。見てるー」
「……あっち向いててってば！」

まあ、俺は俺でいいのかもしれない。
なかなか愛されてるじゃあないですか。

ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

これだけで読めるようにしたつもりですが、どうでしょうか。
自分としては妙に甘くなった気もします。

#01　ギターと少女（前書き）

本編スタートです。
少し分割しました。

#01　ギターと少女

「私があなたの鍾子期（しょうしき）では駄目ですか？」
彼女は言ったのだ。

＊＊＊＊

「はーぁあ」
制服のポケットに手を突っ込んで、中の携帯を触りながら三回目のため息をついた。
右手の中のつるつるした携帯は、昨日、突然鳴かなくなった。

それは壊れたとかではなく、メールのやりとりの最中、相手が唐突に「じゃあ明日ね」と切ってしまったからに外ならない。ラリィの途中でボールを放り投げたまま去ってしまったようなものだ。相手に嫌われているとは思わない。多分……『彼女』の優先順位一位、つまりは『アイツ』が何か関わっているのだろう。その、『彼氏』が。

はてさて、人様の彼女とメール交換で急に切られたからといって、どうして俺はこんなに落ち込んでいるのか。理由は一つ。

『彼女』――古井あずさに横恋慕しているから、だ。

「おはよー、きょーちゃん」

声をかけてきたのは、幼なじみのサイ子だった。前野木彩子（まえのぎ　あやこ）。本当はアヤコと読むのだが、幼き日の過ちから、サイ子と呼んでいる。お蔭様で周りの女子の数人が「サイちゃん」と呼んでいる。

「あー、お早うごぜぇやす」

「おおう、どうした鏡（きょう）ちゃん。元気ないなぁ」

ねーよ。今の自分の恋が不毛であるという確定申告なされた翌日に元気あったら怖いっての。

不意に、隣で椅子を引く音がした。急いで振り向くと、古井が席につこうとしていた。……昨日まで冬服だったのに、今日から夏服にしたんだなぁ。

「おはよ、あずさ」

「おはよう。…飯田ぁ、昨日ごめんね」

突然挨拶のついでに核心を突かれ、体をびくつかせてしまう。

「えっ、あ、ああ、メール？別に良いよそんなん」

全然『そんなん』じゃねぇけどな！泣きたい！

「ええ何、二人ってメアド交換してたんだ？」

「してたよー。ま、つい昨日なんだけどね」

ふふっと笑う古井は、普通に可愛い。すげー可愛い！って感じでは

ないけど、笑うとホント可愛い。好きだなぁ、と再確認して更に落ち込んだ。

＊

ギターを持って外に出ると、まだ若干明るかった。夏に近付いてきたんだな、としみじみ思う。
家から歩いて二分のところに、寂れ気味のパチンコ店がある。その周囲は駐車場になっているのだが、無駄に広い駐車場は中々埋まらず、裏手に車があるのを俺は見たことがなかった。そこに一本だけ立つ、スポットライトみたいな白いライト。そのすぐ下のブロックに座って、ギターケースを肩から下ろした。
週三回か四回、ここでギターの練習をしていた。
練習と言っても、好きな曲を耳コピで弾くだけ。何度も弾いて、飽きたら別の曲を弾く。それの繰り返しだから、練習とは言えないのかもしれなかった。
実は最近は、……自作曲を弾いていた。
店の裏手は小さな畑に面していて、夜に人と出くわすことはまずない。一年くらいやっているが、一度もそんなことはなかった。だからあまり恥ずかしいとも思わずに弾いていたのだ。
ギターケースを開けた。
父のお下がりだから古いが、傷もなく初心者でも弾きやすい。ギターそのものは三年くらいやっているが、昔からずっとこのギターだった。
でも、これでお別れだ。
愛おしむように撫でてから、弾き始めた。

＊

ちゃんとした曲というわけでもなく、なんとなくいつもより長めに

弾いた。
気が済むまで弾いて、俺は息をついた。
そして上着のポケットから折り畳みナイフを取り出した。ちゃっちい切れ味の悪いやつだ。
切れるものといったら、本当に細いモノくらいだ。
変に緊張しながら、ナイフの刃を弦に当てる。
さあ切るぞ、と息を吸い込んだところだった。

「伯牙（はくが）、琴を破る――ですね」

少女の声がした。

あわててナイフを離しあたりを見回すと、すぐ傍に少女が立っていた。
ほんのついさっきまで誰も――
いなかったのに、という言葉が脳に浮かぶ前に、俺は目の前の少女に釘付けになっていた。
可愛らしい顔立ちで、恐らく一・二コ下。茶色がかったふわふわの髪を、上の方だけ高い位置で結わっている。それは良い。だが、俺が釘付けになったのはそんなことじゃない。というか、そんな「ところ」じゃない。もっと下、つまり体、誤解のないよう正確に述べるならば――服装、だった。
薄桃色に桜の散った着物に、紺色の袴。焦げ茶の編み上げブーツを穿いて、それはまさしく――

「タイムトラベラー？」

まさしく、明治時代のような格好だったのだ。

「たいむ、とらべら？虎箆（とらべら）？」

きょとんと小首を傾げた明治少女は、先程聞こえてきたのと同じ声で言った。

なんだ、この女――

頭オカシイのかな――

まぁ、人は見た目によらないって本当だな。雰囲気はまるっきりまともな人なのに、格好があきからにおかしい。そして平然としているからこそ更におかしい。

「あんた誰」の一言が出ない。言いたいのは山々だが、下手に刺激できない。

「ギター、やめちゃうんですか」

質問というより、確認。考えるより先に、目を逸らした。それでも即答する。

「やめるよ。あんたさー、こんな遅くに一人で出歩くなんて危ないよ」

まぁ多分逆に避けられるだろうけどね！

心にもないことを言ったのは、こっちが普通のことを言えば、普通に返してくれるんじゃあないかと期待したのだ。

あと。

彼女の一言に、一瞬動揺した。だから、それを隠すために、わざとどうでも良さそうに言った。「そんなことよりさ、」という感じに。

すると彼女は、困ったように笑った。

「ありがとう。でも、ご心配には及びません。」

何故、と訊くと深みに嵌まってしまいそうだったし、誘われているような気がしたので、敢えて問うことは避けた。ともすると、沈黙が降りた。居たたまれなくなって、不意に浮かんだ話題に縋った。

「そういやさっき、なんて言ったの？琴がどうとか」
少女も沈黙に困っていたのか、ぱっと顔を上げて即座に食いついた。

「伯牙琴を破る」

……諺かな？
「昔、中国に伯牙という琴の名手があったそうです。彼の親友に鍾子期（ようしき）という男がいたのですが、その彼は誰より伯牙の琴を理解した。だから、鍾子期が亡くなった時、一番の理解者を喪（うしな）ったといって伯牙は己の琴の弦を切り、生涯琴を弾かなかったといいます。」
知ってますか、と問うように小首を傾げて俺の顔を覗きこんでくる。
初めて聞いたのでとりあえずかぶりを振ると、彼女は俺から目を離して向こうにゆったりと歩きだした。歌うように続ける。
「伯牙琴を破る……とは、無二の親友との別れを嘆くことを意味します。」
「へぇ…」
「だから！」
曲線を描いていた明治少女は、急にこっちを向いた。あまりに急な動きだったから、ほんの少し飛び上がってしまった。
「……あなた、大事な人をなくしたのですか？」
「……はい？」
なんだ、なんなんだ、初対面の相手になんなんだこの明治少女は。
ていうかそうだ、話がまともだったから普通に聞いてしまったけど、こいつ不審者じゃん！
なんだか嬉しそうに微笑みながら、音もたてずに歩み寄ってくる。
ちょ、来んな！
「大事なギターを壊してしまうのでしょう？まるで伯牙です。そんなことをするなんて、きっと大事な何かをなくしてしまったのでしょう？」
言葉は早くはないが、気が急いているようにまくしたてた。

「ちょ、ちょっと待てよ。何決めつけてんだよ。別に……このギター、そんなに大事なものでもないよ」
最後は穏やかに言ったが、ついつい乱暴な言葉遣いになりそうになる。刺激したくはないが、なんだか軽く挑発されている気分にさせられる。
「大事じゃあないんですか？」
「そんなにね。」
「一年も弾いていたのに？」
「そう……え、ええ？なんて？」
恐らく不審者であるということも、明治コスプレイヤーだということも忘れて、のめり出るようにしてまじまじと少女の顔を見てしまった。
少女は慌てて一歩下がった。頬に、ぱっと朱が滲む。
「え、あ……変なこと、言いましたか」
「一年もって、どういうこと？何、なんで知ってんの？」
詰め寄りながら、その答えが頭に浮かんだ。それしかないと知りつつも、それだけは勘弁してくれと思う。それだけは――
「す、すみません、勝手に聞いて……」
……叫びだす代わりに、頭を抱えて崩れ落ちた。
「しにたいッ……！」
それだけは、恥ずかしすぎる。

数分――いや、本当は一分もなかったろうが、まあ暫くの悶絶と葛藤とまた悶絶の末、俺はようやく顔をあげた。一瞬期待したが、残念ながら、やはり彼女はまだそこにいた。
「……何回、くらい？」
「ええと……すみません、此処での演奏は毎回だと思います……」
「うわぁぁあっ！」
また頭を抱え、今度は叫び出した俺を、明治少女は恐々見ていた。
いかん、これでは俺が不審者だ。

しかし、恥ずかしいものは恥ずかしい。
だって、だって、口に出すどころか脳裏に浮かぶだけでも悍ましい――赤裸々な、しかも自己陶酔入った馬鹿げた曲を――つまり、古井に対する気持ちを歌った曲を、歌いまくっていたのに。全部、全部聴かれていたなんて。
死にたい、いっそ、死にたい、
誰だっけ、こんなこと言ってた人がいた気がするけれど。嗚呼、寧ろ殺してくれと叫びたい。
「あ、あのー…」
「……」
「あの、えと、みんな素敵でし…」
「言うな！」
右手のひらを超スピードで突き出して止めた。因みに左手は顔を覆っている。
「お前が見たこと聞いたこと、全て何も言うな。決して言及するな、どんな形でもだ。忘れろ。」
相手を慮っている余裕などないから、自然低い声の命令口調になる。殆ど脅しに近いが、俺はもう虫の息だった。これ以上傷をつつかれたら本当に死ぬ。顔から発火して死ぬ。
「……あ、とぉ……」
「……」
「……」
困っている。彼女はかなり困っている。しかし、俺は今かなりいっぱいいっぱいで何も言えなかった。胸が詰まる思いだ。……ちょっと意味が違うか。
「あー……じゃあ、弾いて貰えませんか？」
「……はい？」
気詰まりな沈黙は解除（リセット）されたが、一瞬意味がわからなくて思考が停止した。しかしもともとパンク状態だったため、逆にそれが幸いして、彼女の次の言葉が頭にすんなり入った。

「あの、弾いて貰えませんか」
続けて、有名な演歌を挙げる。
「……はぁ」
――結局、その演歌は弾いたことが全くなかったし、聞くのも紅白くらいだったため、別の曲で我慢してもらった。
「じゃあ、ギザギザハートの子守唄」
「……なんでよ。なんか選曲古ぃよ。」
「でも良い曲でしょう、あれ」
実は数年前にハマって、なんとなく弾いたこともあった。そういうわけで、アレンジというか、つまり適当に即興で弾くことになったのだ。

ギターの弦が、空気を打った。

ちっちゃな頃から悪ガキで

弾きながら歌いながら。響く、響く。

＊

ぱちぱちぱち。
ショボイ拍手に迎えられ、曲は終わりに辿りついた。
「お疲れ様ですー。上手いですねぇ、今リクエストしたのに！」

「上手くなんかねーよ、所々止まっちまったし、殆ど適当だし」
初めて褒められたのが恥ずかしくて、ふて腐れたように返してしまう。彼女はそれを、ふふっといたずらっぽく笑った。
「素人にはわかりませんよ」
それだけ言って、彼女は去った。去り際、
「ギター、破ったら勿体ないですよ。袖にされたくらいで」
「……！」
……そうか、そりゃ、聞いてたらわかるよなぁ。
またも恥ずかしい思いをしながら、もう家族が家に帰っている時間だと気付き、慌てて引っ返した。
明日も、あいつはあそこに来るだろうか。

＊＊＊＊

「鏡ちゃん、一緒に帰らない？」
下駄箱の前でサイ子が笑いかけながら問うてきた。どうしようかと一瞬考えて、答えを出すその刹那、「みちのく」と、声がした。反射的に振り返ると、古井が男子に駆け寄っているところだった。古井よりは勿論勝っているが、男子にしては小さい。
陸奥（みちのく）。下の名は、知らない。
古井は、陸奥のことを苗字で呼ぶ。だから知らない。
目立たないタイプだよな、と思った。古井も目立つタイプではないが、決して地味ではない。だが、陸奥は多分「地味」なタイプだろ

う。
――なんで付き合ってんの？
聞いてみたかった。席が隣になったのを良いことにアドレス交換して、そこで、口を滑らせた。……本当は、完全に滑らせたのではなく、半分は意図的だった。ただの興味半分を繕って、軽く聞いてみた。
――なんでだろーなぁ
そう言って、笑ったのだ、彼女は。だから少し期待した。けれどそれが逆に親しみの深さを表しているような気もして、結局のところ、ココロを秤にかけたら期待よりも痛みの方に傾いた。
陸奥を一瞥してから、サイ子に目を戻した。そこでようやく答える。
「いいよ」
微笑んだつもりだったのに、卑屈な笑みになった。気がする。

＊

「携帯貸してよ」
サイ子は言いながら、俺の手元から携帯を奪い取る。中一からの付き合いだから、もう諦めて抵抗もしなかった。
「……鏡ちゃんてさぁ」
「何だよ」
「女の子のアドレスたくさんあるよね」
「突然だなぁ……」
別に『女が切れたことなんてないぜ！』なーんてことはなく、ただ女子と喋るのに抵抗がないだけだ。親しくなったらアドレスを交換する――というか、挨拶代わりにアドレス交換という方が多いが。だから携帯にある女子のアドレスの半分は殆ど使ったことがない。
「女の子友達多いよね」
一応お前もその一人なんだけどなぁと思いつつ口にはしない。
「彼女は一人元カノがいるだけだけどな」

などと言ってはぐらかした。
実を言えば告白されたことなら何回もあるし、「誰々はお前好きらしいよ」とかもちょこちょこ聞く。そういうのって、ほぼ女子と話すかどうかだけで決まるものだともおもうけどね。
「あたしと鏡ちゃんてさぁ、丸三年？ってさ、結構長いよね。」
「まぁ、そうだな」
「……鏡ちゃんはさぁ……本当は……」
「うん？」
表情は思い詰めたように暗く、ぶつぶつと切れた言葉は聞き取りづらい。そしてそれは更に小さく篭った声になっていく。
「……てる……の」
「ごめん、なんて？」
思わず聞き返すと、どこか暗澹とした顔が、効果音でも聞こえてきそうなほど「くるっ」と変わった。いつもの明るいサイ子だった。
「別にぃ？鏡ちゃん、あたしに隠れて女の子遊びに耽ってないか心配してるだけー」
「女のッ……って、んなことするか！」
慌てて、サイ子の言葉に対してではなくその表情の変化に狼狽して、慌てて言い返した。俺の狼狽をどうとったのか、からからと笑う。
そう、いつも通りに。
「分かんないよー？鏡ちゃん見た目だけはそこそこ良いから」
「だけってのに棘を感じるのはあれかね、勘違いかなんかかね」
「やだなぁ棘なんて、褒めてるのにぃ」
褒めてるように聞こえねーよ、と軽くどつく。そうして笑いながら、しかし、何かがひっかかったままだった。

＊＊＊＊

ジャリィン、と、ギターの弦を鳴らす。

「もう来て下さらないものかと」

闇から現れた少女は、やはり着物にブーツの明治スタイルだった。

「別にあんたの為に来てたわけじゃ…」

にこにこと微笑んだままの少女は目の前にしゃがみ込んだ。

近くで見ると、かなり可愛い。

前回は顔の良し悪しに何か感じている余裕などまるきりなかったが、今回は二回目とあって緊張や不安もない。それに、独白の様な曲を数多聴かれていたとあって、恥ずかしさを乗り越えた今は、逆に可怪しな親密感があった。

「あんたさぁ、俺がフラれたからギター止めるって分かってて、琴がなんたらとか言ったんだろ？…大事な人を失った、とか」

「伯牙琴を破る、です」

突然の詰問口調にも慌てることなく、やんわりと訂正を加える。恐らくこの叱責は予期されていたのだろう。

一拍おいて、彼女はギターに視線を落として言った。

「確かに、そうです。…今にして思えば、ひどく意地の悪いことですね。申し訳ありませんでした。……許していただけますか？」

真実申し訳なさ気に上目遣いで見られると、自分がひどく嫌な奴になったような錯覚を覚える。

「そんなに怒ってたわけじゃないし……悪いと思ってんなら、別に……」

もごもごとそこまで言うと、彼女はぱぁっと顔を赤らめた。

「許していただけますか？ありがとうございます！」

にこにことしている様子を見るに、感情の起伏が激しい子なんだな

と思う。
と、彼女の表情の変化にふと思い出したことがあった。
「三日もみえないので、もういらっしゃらないのかと……」
「ああ、それは、練習してたからさぁ」
そう言って、前にリクエストされた演歌のサビを軽く弾く。
途端、頬を紅潮させ顔を輝かせた。
「れっ、練習してくださったんですか？」
「まあ、俺へタクソだから三日じゃサビしか覚えらんなかったけど」
それに、そんなに熱心に練習したわけでもない。サビも勝手にギターアレンジにしたのでかなり簡単だ。
しかし、それを説明してなお、泣き出すのではと心配になるほど興奮した様子で聞かせてほしいとせがんできた。
「まぁ、その為に練習したからそれは良いけど…本当にショボイからな、ガッカリすんなよ」
そう言ってから、今まで聴いてたなら俺の力量くらいわかるかと気付き、ともかく弾き始めた。

「……」

彼女は黙りこくって聴いていた。サビだけなのですぐに弾き終わってしまったが、一応「……どう？」と聞いてみた。無論、恐る恐る。
「……」
無言で、こくこくというよりブンブンといった勢いで頷いてくれている。どうやら合格らしい。
と思ったら。
「もう一回お願いします！」
あ、アンコール？

さっき間違えた箇所に気をつけながら、指を、手首を動かす。ギターで演歌って変なの、と思っていたら、

戻れなくても　もういいの

え、ちょ、歌い出しちゃったよこの人！まままマジかよ！
本気でびびったが、弾き終わった瞬間、ふと気付いた。
彼女は、おそろしく綺麗な歌声の持ち主だということに。

「すいません……なんかどうしても歌ってみたくなってしまって……」
恥ずかしそうに俯くが、それどころではない。
「あんた、すごい声綺麗だな！」
「へ？」
ぽかん、と放心したような顔でこちらを見つめている。あまりにも予期せぬ言葉だったらしい。
「ほんと、めっちゃ綺麗じゃん。何、ボイトレとか行ってないの？」
感激のあまり一歩のりだすと、彼女の顔色が変わった。
さっと青ざめた。
そして直ぐさま一歩ひいた。
俺が悪いのだろうが、流石に少し気分が悪い。興奮が冷めた。
「……あ、ごめん、びっくりしたよな」
「……っあ、あ…ごめんなさい。貴方が悪いんじゃあないんです」
「いや、年上の男に詰め寄られたら怖いでしょ」
自嘲気味に言うと、ふるふると力無く首を振った。
「違うんです。私…最近全く人と話してなくて……人が、駄目なんです」
――人が、駄目？
「人間恐怖症ってこと？」
「……そうです。」
「え、でも、俺に話しかけてきたじゃん」
くっ、と顔を上げる。表情は真剣そのものだった。

「貴方は、特別。」
かっ、と熱くなるのを感じた。
恋愛感情などでなくとも、他人から「特別」と言われるのは、恥ずかしくて、嬉しかった。
「……でも、話しかけるのに一年かかりました。それに、触るのは、全然。」
ひどく落ち込んだ少女に、反射的に呼びかけようとして、言葉に詰まった。
「……じゃあ、名前教えてよ」
「はい？」
少女は顔を上げる。
「名前。友達になったらまず訊くだろ？」
「友達……」
「そ。俺は、飯田鏡弥（いいだきょうや）。鏡に弥生の弥でキョウヤ。」
少女は暫く呆然としていたが、不意に我に返り、慌てて言った。
「わ、私は、…私、は……」
「うん？」
えへ、と笑って言う。
「……暫く呼ばれていないので…忘れてしまいました」
「……はぁッ？」
まさか、嘘だろ？
「話すのが久しいもので……名前が無くても、友達……なれるでしょうか？」
慌てて言う。本心忘れてしまっているらしい。なんという。
「……」
考え、即決した。
「名前が無くて友達になれるか！……ということで」
一瞬ショックを受けた彼女は、「え」と漏らして俯きかけた顔を上げた。
「俺が新しくつけてやる！」

「……本当ですか？ありがとうございますッ！」
いいのかなぁと思いつつ、とりあえず勢いで思案し、ふと頭に浮かんだ名前を呟いた。
「しばらく」
「……はい？」
「シバラクってのはどうよ」
「……はい？」
「うん、良いな。漢字は……そうだなぁ」
「……あのぅ、「しばらく」ですか？私の聞き違いですか？」
「いや『しばらく』だけど？……うん、じゃあ、芝生の芝に楽しいで『芝楽（しばらく）』ってのはどうよ」
目の前には、またしても放心したような、どこか愕然としたような表情の『芝楽』が立っていた。

「あ、話を戻すか、芝楽。」
「うう…なんだか釈然としませんが、まぁ自分の名は自分で付けられないのは常ですから、良いでしょう。…話とは？……飯田さん」
ぎこちなく苗字を呼んだため、少し焦った。
「ちょ、いいよ、下の名前で良いよ」
すると少々狼狽えるようにきょろきょろと辺りを見回して、俺を見据え、恥ずかしそうに――しかし嬉しそうに、呟いた。
「……鏡弥さん」
やっぱり可愛いなぁ、と思う。さぞかしクラスでモテることだろう――いや、明治コスプレのせいで台なしだが。
「ああ、えっと……芝楽さぁ、声が綺麗だから演歌よりもＪ－ＰＯＰのバラードとか歌ってみればいいんじゃない？」
「自衛…六腑？薔薇？」
んん？伝わってないかも？人間恐怖症となんか関係あるのかな。
「とにかくさ、今から俺が弾くから――」
言いかけて、止まった。芝楽は困ったような顔をしている。多分、

俺の表情が急に暗くなったからだろう。
「……ごめん、忘れて。俺、もうギターやめるんだったわ」
口を「え」の形にしたまま、芝楽は俺を見つめていた。居心地が悪くなり、ギターをしまうために俯いたふりをして目を逸らした。
「今日あの演歌も弾いたし、これでお終い。もうここに来ることもないかも」
「そんな……やめる必要なんてないじゃあないですか」
なんでこいつ、泣きそうな声になってんだろう。本当、感情の起伏が激しい。感情が表に出やすい人なんだろう。
「ギター続けてたら、どうしたって古井のこと考えちまうだろ。うじうじと引っ張るより、すぱっと諦めたいんだよね。情けないけど、ギター切るくらいしないと気持ちにキリがつかないと思うから」
情けない。本当に情けない。まだ初対面に近い女の子に、こんなに全部吐露して。なんなんだよ、俺。
「じゃあ……」
芝楽の声が降ってくる。じゃあ、か。じゃあ仕方ないですね……そんなこと言わないだろう、彼女は。じゃあ本当に切るんですね、とかだろうか。
「じゃあ、じゃあ……」
しゃがみ込んで、俺の顔を覗きこむようにして、言った。
「私があなたの鍾子期では駄目ですか？」
「……は？」
「私が貴方のギターを理解しますから、だから、私の為に弾いてください」
なんの冗談かとも思ったが、冗談ではないらしい。真剣そのものの顔をしていた。しかし冗談じゃないにしても、理解できない。
「待って、しょーしきって……誰よ」
芝楽はせっつくような、いかにももどかし気に顔をしかめて答える。
「嗚呼、三日前話したでしょう？伯牙の無二の親友です」
ああ、と一言漏らし、思い出した。鍾子期なんて名前だったか。そ

れにしても、やっぱり意味が分からない。
「……で、どういう意味さ」
「だから……、ああもう、つまり、ギターをやめないでほしいんです。彼女を思い出してしまうというなら、私の為だけに弾いてください。……今まで、彼女の為に歌ってきたんでしょう？」
とにかくギターはやめては駄目だという。
「ギター弾いてるとき、鏡弥さんのカオは一番きらきらしてました。ギターをやめるのは間違ってます」
きらきらとか。よく恥ずかしげもなく言えるものだと思った。しかし――良い響きだな、とも思った。「輝いていた」とかよりも自然で、世辞ではない気がした。少しだけ――ほんの少しだけだが、ギターを弾く自分のカオをみたくなった。
「弾くのを休むのだって良い。でもやめるのは間違ってます、絶対。」
結局彼女の迫力に圧されて……そして少しだけその言葉に惹かれて、ギターをやめるのは止した。
ただしその日はもう弾く気になれず、芝楽と話すことにした。
大体、友達になったはずなのに、俺はこいつのことをまるっきり知らない。なんで明治コスチュームに身を包んでいるのかとか、外来語は知っているものと知らないものがあるのかとか、そもそもどうしてここにいるのかとか、まあ山ほど質問はあったし、山ほど質問してやった。……しかし、結局大したことは分からず終いだった。分かったことと言えば、いつも日が暮れると此処に来るということくらいだった。
「まぁ私のことは良いじゃあないですか」
困窮した笑みを浮かべて、そう言った。
怪しいと思いつつも、怪しいのは初めからだと思い直し、最終的にはどうでも良くなった。
「鏡弥さんの話を聞かせてくださいな」
とせがむので話題を探すとふと、さっき思い出したことがあるのに

気付いた。
「俺の話かって言うと微妙なんだけど。」
そう前置きして、今日あったことを話した。
「俺の仲良い女子にさ、サイ子ってのがいるんだけど。そいつの様子がヘンだったんだよね」
「変……ですか」
ちょこんとしゃがみ込んだまま、小首を傾げた。茶色がかった髪が揺れる。横髪を後ろで結わった髪型はこの前と同じだ。
「なんか俺が女友達多いとか、女遊びしてるとか」
「してるんですかッ？」
「してねーよ！……とにかく、普段はそういうこと言わねぇし…あと、なんかぐちゃぐちゃ言ってた」
どんな、と促されて、頷く。
「なんか……俺が、本当はナントカじゃないかとか、そんなようなこと。よく聞こえなくて聞き返したらはぐらかされた」
「んんー……」
真剣な顔で眉を顰め、悩んでいる。それからコンクリートの地面を睨んだまま、
「サイ子さんは、貴方が彼女――古井さん、でしたっけ――のことを好きというのはご存知なんですか？」
と訊いてきた。
「……知らないよ。誰にも言ってねぇし」
サイ子に言うなど考えられない。そもそも古井とサイ子は友達だし、最近はクラスでは三人で話すこともしばしばあった。
と、芝楽は随分不思議そうな顔をして、
「言ってないから知らないってことですか？」
と言う。どういう意味が測りかねて黙っていると、意味ありげな微笑みを湛えてこう言い直した。
「言っていないからといって、サイ子さんが気付いていないということではないかもしれませんよ」

「……。」
サイ子はそんなに勘の良いやつだったか。分からない――というより、知らないのかもしれない。なんだかんだ四年近く縁が続いているわけだが、意外と知らないもの……らしい。
「サイ子さんかぁ。会ってみたいですね」
ぽつり、と呟いたのは、本当に思わず零れたといった様子だった。
沈黙に耐えられず、というか、サイ子が気付いているかもしれないという考えから逃れたくて、何も考えずその呟きにこう答えてしまった。
「じゃあ、今度連れてくるか」
「えっ、いいんですか？」
ぱあっと顔が輝いた。本当に、表情に富む女の子だ。
しかし、すぐにその輝きが陰った。
「……でも、こんな時間に女の子が出歩くのは危ないでしょう？お気持ちはとても嬉しいですけど…」
「あんたはどうなんだよ、あんたは」と喉まで出かかったが、なんとか言わずにおいた。やはり触れるのは恐ろしい。……まぁ本人が「ご心配なく」と言っていたので余計な心配はしないことにしよう。
「まぁ、別に近所だから俺が送ればいいけど……よく考えたら、あいつ、来るかなぁ」
変な女の子に会わせたい、なんて言ったら訝るだろうし、ギター練習してるから聞いてよ、なんてのも恥ずかしくて言えやしない。そういうわけで――

＊＊＊＊

「今日の夕方、暇？」
そういうわけで、こんな微妙な聞き方になってしまったのだ。
本当は「今日の夜」と言う方が正しいように感じるが、なんだか妙な響きを含んでしまうような気がしたのでやめた。サイ子は眉を顰め、
「何、それ。夕方？暇じゃないけど？」
と言った。……夕方でも駄目らしい。
意気消沈して大袈裟なくらいにがっくりすると、それを見兼ねたように顔を覗き込んでくる。
「……そんなに大事な用事なの？他の人誘ってみたら？」
「大事っていうか……サイ子に来てもらわないとなぁ」
芝楽が会いたがってるからなぁ、とは口の中だけで呟いた。
表情が豊かだからだろうか、なんとなく喜ばせてやりたいな、と思った。

「暇に、なってあげてもいいよ？」

「え」
作ったようなふざけた『上から目線』。優しい色が滲む。顔を上げた。
「どういう意味？」
「だから…そんなに大事な用事があるわけでもないし、ずらしてあげても良いよってこと。」
「えっ、ちょっ、マジで？明日とかでも良いんだけど……今日来れんの？」
「まぁ、うん。今日が良いんでしょ？」
「おう、それは！早い方が良いし！いやーサイ子お前良い奴だなぁ」
俺は満面の笑みで肩を軽く叩く。芝楽の喜ぶ顔が浮かんだ。
しかし目の前には、サイ子のどこかぎこちない笑顔があった。

「そう…あたしは良い奴なんだから！感謝してよね？」
あたしみたいのが友達で良かったでしょ？という言葉に、俺は頷くだけだった。

「あーずさっ！今日も陸奥と帰んの？」
古井に飛び付くサイ子を見て、自己嫌悪に陥る。思ってない、今の一瞬だけサイ子と成り代わりないなんて思ってない。諦められていどころか下心までばっちり補完なんてそんなこと、ない、ない。
「今日はねぇ、なんか友達と寄るとこあるからって。待つのも面倒だし、一人で帰ろうかな」
自分の耳が常態の三倍になった気がした。ピクリどころではない、警告音（アラート）が聞こえてきそうなほど盛大に反応した。顔には出してない…出てないと思うが。
「えぇー、じゃああたしらと帰ろうよ」
うおおおサイ子ナーイスッ！
内心ガッツポーズをしていると、サイ子に手招きされた。この時ばかりは、にやけていない自信はまるきりない。

ふと、どこかで「諦めたんじゃなかったの？」と声がした。
芝楽のような、サイ子のような、どちらともつかない声だった。
俺は、それが聞こえないふりをした。

＊

結果からいえば、正しかったのだと思う。
どういう意味かと言えば、一緒に帰ったのは諦めるのに適当な行為であったろうということだ。
つまり。
「それでさぁ、あいつ馬鹿だからあたしが何で怒ってるとか分かんないんだよね」

「いやぁー男はみんなそうだって！女の沸点が分かんないんだよね」
「しかもあいつさぁー」
陸奥の話がね、多いんですよね。
多分本人は意識してないのだろうし、惚気というよりも貶してばかりだから聞いてて嫌になるようなものではない。ない。断じてない。
「ねぇ飯田」
「へっ？なな何か？」
「鏡ちゃん何キョドってんの？」
唐突に呼びかけられ、つい大仰に反応してしまう。一体何だ、いやそんなたいしたことじゃあないだろうけど、などと内心かなり浮足立ちつつ古井の次の言葉を待つ。
と。
「飯田って、最近彼女と別れたの？」
……は？
「……え、何の話？」
唯一彼女がいたのは中学のハナシですが？
「なんかそうやって聞いたんだけど」
「いや、それ違う人じゃねぇ？鳥喰（いりはみ）とか……なぁサイ子、俺高校で彼女なんか出来てないよな」
同意を求めつつ、俺の与（あずか）り知らぬところでそんな噂が流れているのかと不安になったが、意外とあっさりした返事が返ってきた。
「あ、やっぱ間違ってたんだ」
「え、”やっぱ”？」
古井の顔を見ると、あっけらかんと笑っている。そしてもう一度「やっぱりね」と言った。
「いやさ、陸奥がそう言ってたもんだから。でもあいつ、人を覚えんの苦手だからさ、間違ってんじゃないかなーって思ってたんだよねぇ。飯田、そんな風にも見えなかったし」

――また、陸奥か。

諦めた、はずなのに。

どうしてこんなに苦いんだろう。黒くて濁って淀んでいるんだろう。悲しいとか苦しいよりも、苛立つ。陸奥陸奥陸奥って、なんなんだよ？そんな奴良いから俺見ろよ。

だがそう叫ばなかったのは、恥ずかしさがあったからかもしれない。陸奥と古井が二人のときに俺のことを話していた。それが恥ずかしかった。悔しかった。ひどく恥ずかしかった。

黙り込んだ俺をどう思ったのか、古井もそこで言葉を切ったまま黙り込んだ。

ぷつん、と途切れた会話は静寂だけを残して、そのしっぽすらも見えなくなった。これではまずいと思い、何か言おうかと思ったが、どうにも言葉がでなかった。苛立つやら恥ずかしいやらで、言葉がでなかった。

これ以上の沈黙は気まずい、と思った時。

「そういえば、鏡ちゃん中学の時は一人いたよねぇ」

暢気な声。サイ子だ。

この微妙な沈黙をどうとも思わないわけはないから、意識的に暢気な声を出したのだろうが、とてもそうには思えない、さりげない一言だった。

「へぇ、いたんだ？」

「まぁ、一応ね。短かったけど」

苦笑いで答えると、古井はにやにやと笑いながらこちらを見る。

「振ったの、振られたの」

そこを訊くかよ、と弱りつつも、「自然消滅、みたいな？」なんて答えようとしたが、横槍が入った。

「見た目よりもずっとへたれだから愛想尽かされちゃったんだよねっ」

爽やかな、しかし古井のにやにや笑いよりもずっと厭味な笑みを浮

かべつつ、頭をわしわしと撫でてくる。それをわざと大袈裟に振り払って、
「自然消滅だよ、自然消滅！なんか、お互いあんま話さなくなってたし」
と身を躱すように言って笑った。
そんな俺達の寸劇を見て、古井はけらけらと笑った。

古井と別れ、サイ子とは他愛もない話をしながら「夕方迎えに行く」という約束を交わしたのち別れて、一人家路に着いた。
そこで思ったのは、やはりサイ子は呼吸を分かってくれていて気持ちが良いということ。
そして、やはりまだ古井が好きだということだった。

#02　黄昏時にて

「ごっ、ごめんね！」
そう言いながら慌てて玄関から現れたのは、もちろんサイ子だった。インターホンを押して「ちょっと待って！」というやたら切羽詰まった指令を下され、待つこと一、二分。まさか何十分と待ちぼうけを食わされるかと危惧した割に（当たり前だが）たったの数分で済んだのは有り難い。が、やはりただ待つだけというのは時間を長く感じるものだ。
サイ子は随分と薄着だった。袖無しの空色ワンピースに白い半袖を羽織っている。なんと呼べばいいのかいまいちわからないが、ふんわりとしていて少し透けるくらいに薄手の上着だ。丈は短い。ヒールの低いサンダルを履いていた。
「遅れてごめんね！」
重ねて謝るサイ子から、つい目を逸らす。
「別に良いけど……呼び出したのこっちだし」
別に、同年代の女子の私服を見たことがないわけじゃない。サイ子の私服だって、中学の頃と去年の修学旅行や林間学校、クラス会なんかで何度か見ている。
だが、なんというか、こうもラフな恰好は初めて見た。そもそも制服以外ジーパンしか見たことがなかった。
こういう恰好、するんだな。
「なんか……そうゆうカッ…コ、」
口ごもるように言うと、
「え、何か言った？」
と笑顔で聞き返された。聞き返されると、もう言えない。改めて言うなど、さりげなく言うことすら不可能だったのに、どうすれば可能になるというのだ。故に、あらぬ方を向いてこう言うしかなかった。

「別に、なんでもねぇよ」
考えてみれば、そもそも女子の服装に言及すること自体が恥ずかしすぎるじゃないか。まして、まして……に、似合う、とか、言えない！そもそも思ってない！だから黙れ心臓！
俺の動揺を露も知らず、隣を歩くサイ子は俺の背を指して話しだす。
「それ、ギター？用事って、ギター聞くってこと？」
「ん、まぁな。そんなとこ。」

古井が好きだというのに、一体全体どういうことなのか。女なら良いのか俺は。というか、そもそもこれはあのサイ子だぞ。あの、前野木彩子だぞ。
嗚呼。

「毎日こんなとこで演奏してるの？」
「毎日じゃないけど、週に二、三日」
「ふーん……知らなかったわ」
その声にどこか不満げな色を見た気がしたが、それよりも、まずは芝楽に会わせるのが第一目的であり、目的のほぼ全てでもある。さて、その芝楽はといえば。
「……あれ？」
いないし。まだ二回しか会っていないが、ほぼ毎日この時間に此処に来るというようなことを言っていたのに、おかしい。
「どうかしたの、鏡ちゃん」
「あ、いや……」
困った。あいつの為に……いや、あいつが会いたいと言うから連れて来たのに、いないというのはどういうことだ。困窮である。行き詰まりだ。まさに四面楚歌。いや四面楚歌は違うか。とにかく困った。が、暫くのちに大して困った自体でもないことに気付いた。
別に、弾いてりゃいいんじゃん。
芝楽はまぁそのうち来るだろう。今日誘ってみるとは言っておいた。

「……サイ子、実はさ」
「え…な、何？」
サイ子がぎこちなく笑う。……うん、やはり言っておくべきだ。決断した俺は、一瞬の沈黙の後、切り出した。
「ギターの練習してんだよね、此処で。週に二、三日だけど…」
言葉は一旦そこで切れた。サイ子の顔がかなり怖かったからだ。まるで般若。
「……それ、さっきも聞いたけど？」
「え？あ、そうでしたっけ……それは、すいません……」
だからってそんなに怖い顔しなくとも。辺りが暗いから尚更怖い。自然、引け腰の遜り口調になる。
「んで？」
「あ、ああ……えと、それを一年くらい続けてるんだけどさ。こないだなんか…ッ…中学生が来て」
「中学生」
「そう」
女の子、と言いかけてやめたのは、なぜだか怒ってるらしいサイ子に話すと怒られそうな気がするのだ。サイ子は俺が女の子と仲良くすると良い顔をしない。良い顔どころか「コンのタラシがッ…！」という顔をする。だから、失念してるみたいだから言わせてもらうが、お前も”女の子”だ！
「実は一年前から聞いてましたとか言われて。こっちは恥ずかしいの何のって感じだし、なんかそいつ格好も変だし」
と一応予備知識を補足しておく。
「だけどなんか面白い奴だからちょっと話すようになったんだよ」
「ふーん？じゃああたし必要ないね」
だ、駄目だ、完全に怒ってる。
「いやいやいや必要！必要です！……実は、話をしたらそいつがお

前に会いたがってさ」
そこまで言うと、残りは二つの声に遮られた。
「はぁッ？」「ああもうッ！」
「へ？」
確かに耳に届いた二種類の声。一つは前方から、一つは後方からだったように思える。前にはサイ子。躊躇わず振り返った。と、パチンコ店の角に半身を隠すようにしている少女を見つけた。もうそろそろお馴染みの、和服に袴・編み上げブーツ。明治から間違ってやってきたタイムトラベラー。
「…芝楽、何やってんだお前。」

芸が無くて申し訳ないが、また結論から言わせてもらう。
芝楽が明治コスチュームプレイヤであったことが幸いであった。
来たのが女子中学生だと分かった時、どれほど悪し様に罵られるだろうかと考えていたが、女子であることよりも中学生であることよりも、まずその服装に反応し、興味を持ったのだ。
「中学生っていうから、すっかり制服のイメージがあったわ、あたし」
ああ、それは別にひっかけようと思ったわけではないのだが。変な恰好とは、制服をやたら着崩しているイメージだったらしい。最初のショックを緩和しようとした俺の思惑は見事に外れたわけだが、結果的には良かったのだ。
「えーと、はじめまして。あたしはコレの友人兼保護者の、前野木彩子。」
「お前いつから俺の保護者になったよ、おい」
初対面のコスプレイヤにも臆することもなく笑顔で自己紹介をする。俺という仲介を経ているとはいえ、我が友ながら中々の適応力だ。
「……」
芝楽は黙っている。普通に考えて逆じゃ……？しかし、芝楽はただ

ただ呆気に取られたようにサイ子を見つめていた。……が、原因はすぐに知れた。
「え、アヤコさん？ですか？」
「！」
「ああっ！」
「？」
「バッ……この馬鹿鏡弥！まぁたあんたあたしのこと”サイ子”ってしか呼んでないんでしょう！」
その後もなんやかんや言われたが、一人状況の飲み込めていない芝楽の為、仕方なく悪態と罵詈雑言を連ねる作業をやめ、簡単な説明をする。
「なるほど。つまり彩子さんはサイ子さんなんですね！」
言葉だけ聞くととても馬鹿らしいが、言いたいことは分かるし否定も出来ないので、とりあえず俺たちは頷いた。
それから芝楽は少し言いづらそうな顔をサイ子に向けた。
「それで、その…なんとお呼びすればよろしいでしょう？アヤコさんか、サイ子さんか」
芝楽の怖ず怖ずとした言い方で察したのか、サイ子は少々投げやりに言う。
「いいわよ、サイ子で。鏡ちゃんからそう聞いてたらそっちの方が呼び易いでしょ？学校でもサイちゃんとか呼ばれてるし」
お前のせいでな、とばかりに睨んでくるのを気付かないふりをして躱し、嬉しそうにしている芝楽に「よかったな」と言っておいた。
「はい。……サイ子さんは寛大ですね」
邪気の無い笑みを湛えて褒められ、サイ子は若干恥ずかしそうにしながらも機嫌を良くした。場が和む。
「ほら、お前も名乗れよ」
「ああっ…、失念していました。これは失礼。」
そう言うと着物を正し、改めてサイ子に姿勢よく向き直る。両手は体の前で軽く重ねられている。

「私は、芝生の芝に楽しいと書いて、芝楽と申します。」
滑らかな動作で、厳粛な礼を一つ。
意外と良いとこのお嬢様なのか？と思わせる仕草だった。そういえば、思い返してみればこれまでも動作が美しかった気がする。
だが、もしそうだとしたら。
……何故、演歌とギザギザハート？
「”芝楽”？苗字？」
「あ、いえ…訳あって、それで全てです」
続けて、諸々の事情を話した。人間不信だったこと、名前を忘れたこと、俺が命名したこと。
「ネーミングセンス悪ッ！」
おい、芝楽の身の上話（？）を聞いておいて、感想がそれか。最初の感想がそれか。
「なんでだよ、良い名前じゃん！」
「いやぁー可愛いには可愛いけどさぁ、もうちょっと日本人的な名前にしようよ…」
駄目だこいつ、とばかりに首を振る。なんとも憎たらしい奴め。横目で当の芝楽を確認すると、奴は奴で首を傾げていた。
「ねえ、民具扇子……？」
あ、こいつ横文字駄目だったっけ。
「ったく……とにかく、よろしくね！芝楽…さん」
「はい！呼び捨てで構いませんよ」
そうにこにこと笑う。俺なんか最初っから呼び捨てだ。まぁ、自分で付けた名前にさん付けで呼ぶ方が変だが。
「じゃあ、芝楽。ねぇ、あんたって幾つなの？中学生って言ってたけど」
「ああ……えと、十六…いや、満十五になります。お二人は？」
「あたしは十六だけど、鏡ちゃんは誕生日早いから十七かな」
早速会話が進んでいる。サイ子は基本、かなり社交的なタイプだから、不思議ではなかった。しかし、人間不信の芝楽も普通に話して

いるのには驚いた。……ん？いや、さっきは「人間不信だった」と言ってなかったか？ということは、もう治ったのか？……前は、今でもそうだというようなことを言っていた気がしたが。俺の記憶違いだろうか？
色々考えつつ、二人を観察する。当たり障りのない話題ばかりとはいえ、会話が絶えないのはすごいと思う。女子同士だからというのもあろうが、恐らくは、そもそも気が合うのだ。
なんだかその図がやけに微笑ましく、ほっこりした気分で眺めていたが。
「それで、鏡ちゃんてどんなの弾くの？」

「そうですねぇ、大低は…こ」

「ばばばばばかやろぉぉお！黙れ芝楽！芝楽黙れ！」
何さらっと言いかけてんだてめぇぇぇえ！
「すっすみません！言わない方が良かったですか？」
あろうことか、申し訳なさそうに問うてくる。これが厭味でなく素なのだから中々どうして凄い性格と言えるだろう。
「あっっったりまえだろうが！お前に聴かれてたってのだって十分ダメージ引きずってんのに！」
だからびっくりすんなって！なんだその今初めて知ったみたいな顔！
「なぁに、そんなに恥ずかしいの弾いてたの？」
「なっ、そっ、だっ、……あああ、もう！とにかく！芝楽は黙ってろ！」
肩で息をするほどに叫んだあと、不意に、声が頭をよぎった。

　　気付いていないということではないかもしれませんよ

しゅんとなってしまった芝楽を横目で見ながら、その意味を考えていた。

――もし、サイ子が知ってたら？
今日、古井を誘ったのも、そのため？なら、どうして俺に何も言わない？気付いた時点で言うんじゃないか？俺に遠慮している？……何を遠慮するっていうんだ。
考えても考えても、考えれば考えるほどに分からなくなっていく。
ああ、女ってよく分からん。
「……されたのよ？」
「はい？」
気付けば俯いて情けない顔をしていた俺は、不意のサイ子の声に驚いて顔を上げた。
「だからぁ、なんであたしが呼び出されたのかって聞いてんの」
「へ、ああ、……だから、芝楽が」
「それはもう聞いた。で、会ったじゃない。もう帰っていいの？あたしは」
芝楽と話していて機嫌が良さそうだったのに、一転して不機嫌、寧ろ怒っている。ああ、本当女ってよく分からん。
「サイ子、帰りたいの？」
とりあえず、と思って訊いてみたが。
「そういうこと言ってんじゃないでしょうが！」
……怒鳴られた。
どうしようか。今は何を言っても怒らせるだけな気がする。というか確実にそうだ。
困り果てて黙っていると、それすら気に入らなかったようで、一瞬空気が張った。
――泣く。
「サイ子さん？」
空気が弛緩する。芝楽の柔らかい声で、俺はほっと息をついた。それから、我にかえった。
――泣く？
――怒鳴る、とかではなくて？

泣くと思った。サイ子が泣くと、そう思ったのだ。
「鏡弥さんのギター、聴いていきませんか？……いえ、私が、貴女に聞いてほしいのです。」
「あたし、に？」
他の人じゃなくて？とサイ子が尋ねたかのように、芝楽は微笑んで頷いた。
「他の誰でもなく、貴女に」
何故か、少しだけ震える声で、その少女は聞いた。
「……なんで？」
芝楽は困ったように、しかし芝居がかった風に、「ええと」と漏らす。
「話を聞いていたら、鏡弥さんが一番気を許している相手が貴女だったので。」
少女はそれには応えず、こちらを振り返った。
「鏡ちゃん、聞かせて？」
俺は黙って頷いた。

＊＊＊＊

「下手くそ」
三曲連続、お気に入りの中でもマイナーなモノを選んで弾いた。それを聴き終わって拍手をしたサイ子は、本当に嬉しそうに笑ってい

た。
「お前、第一声がそれか！」
「あはは、うそうそ。あたしはギター分かんないけどさ、良かったよ。すごく」
ちょい、と付け加えられた「すごく」が、なんだか可愛いなと思ってしまった。
「……褒めても何も出ねぇぞ」
照れ隠しに顔を背けたら、そこに芝楽がいた。
「おい、何にやにやしてんだお前」
「はっ、はい！あ、いやにやにやなんてしてませんよ！言い掛かりです！」
口を尖らせて抗議するものの、未だに笑いが口元から抜け切っていない。自覚があるのだろう、そこまで言って、はぐらかすように笑った。
「別にぃ……天の邪鬼だなぁと思っただけですよ」
彼女の言葉は残念ながら中々的を射ていたので、分かったような口きくな、と返した自分はずいぶんと拗ねたような口調になっていた。
この女、人間不信って嘘だろ……平気な顔で中々”刺さる”軽口叩きやがる。
「鏡ちゃんもね、昔は素直で可愛かったんだけど。」
「あら、今でも可愛いですよ」
「そんなこと言ってくれるの、芝楽くらいだよー？」
……なんで井戸端会議になってんだよ。そしてサイ子、お前は俺の母かなんかか。
「ところで、お二人はいつ頃出会ったのですか？」
小首を傾げる仕種がかわいらしい。しかしそれは、中学生らしい可愛さというよりも、大人の女性が時折垣間見せる可愛らしさとかいう類な気がした。
「ええと、中二でクラス一緒になったからさぁ。だから、丸3年以上の縁かな。」

そう。中二からの付き合いだ。
昔っからサイ子は変わっていなかったし――若干の「成長」と呼べるものならばあるかもしれないが――、恐らく俺も変わっていない。距離も変わらない。だから、確かに芝楽の言葉は的を射ているのだ――「一番気を許している」というのは。
なのに、芝楽は言う。
――気付いていないというわけではないかもしれませんよ――
なんで黙ってんの？どうして言わねぇの？
訊けない言葉は鳩尾あたりに、暗雲みたいな感触で溜まっていく。
結局、この日は聞けずに夕方は終わりを迎えたのだった。

＊

「芝楽って可愛いよねっ」
にこにこと笑って言うサイ子を見て、ああ会わせて良かったなと思った。
「あのコスプレが無かったら……普通に可愛いんだけどなぁ」
ああ、自分遠い目してるなぁ。
「え、あれってコスプレなの？」
目を見開いて驚いた顔をしているサイ子に、お前なー、と呆れ混じりに言う。
「あれ、コスプレじゃなかったらなんなわけ？」
「……そうだよねぇ、考えてみれば。なんかあんまり似合ってたから」
「から？」
「タイムスリップして来たのかと思ってた」
「……お前、本気？」
「漠然としたイメージでね。まさか本気で信じちゃいなかったけど」
からからと笑うサイ子だが、こいつなら『実はタイムトラベラーで

した！』などと言われても動じない気がする。何たって前野木彩子ですから。
「でも、」
気付けば、辺りはかなり暗くなっていた。夏と言ってもまだ初夏の頭だ。案外暗くなるのは早い。芝楽と別れた時はまだ”薄暗い”程度だったが、そろそろ本当に暗くなってきていた。こういう時を『夜の帳が下りる』と呼ばわるのだろうか。
「うん？」
「今日は楽しかったよ」
向けてくる笑顔は、先程の驚きに満ちた顔よりも暗いベールがかかっている。それでも、うっすら輝いているように感じた。
「そりゃ良かった。誘った甲斐があったってもんだ」
「ふふ、鏡ちゃんにしてはナイスだったよ？それに……」
「…それに？」
軽く促す。空気というか、雰囲気というか……そういった類の「それ」が、少しだけ変質した気がしたからだ。重く、若しくは冷たく…或いは、鋭く。
「あの子、聡い子だよ。それに、心配りも出来るし」
「……」
聡い……か。ならば、あいつの推論は正しいのだろうか？
「心配りとかは分かんないけど……確かに妙に大人びてる所はある……気がする」
しばらく沈黙のままだった。黙々と暗い夜道を街灯に照らされながら歩くうち、ほこりと浮かんだ言葉を口にしようとして、思い留まった。
そのうちサイ子の家に着いた。親に見られるとどうのだの言い、そそくさと家に入っていった。俺もさっさと帰ろうと歩き出してすぐ、携帯が鳴った。閑静な夜空に思いがけず五月蝿く響いた。
かちっ。
小気味よい小さな音と共に現れたディスプレイには『メール受信

サイ子』と表記されている。
「はぁ？」
メールを開くと、

ーーーーーーーーーー
ｆｒｏｍ：サイ子
ｔｉｔｌｅ：ごめんね

ごめんね！うちの親、
変なトコでテンション
上がるんだ…。

今日はアリガト
ーーーーーーーーーー

「変なトコでテンション上がる……？」
まぁ、大方「今の誰？彼氏？名前は？」とかしつこく聞かれるということだろう。中学からの付き合いと言っても、親とは殆ど面識が無いし。
アリガト、は、まぁ送っていったことも含めてだろう。そういう所は律儀な奴だ。

薄い黒に覆われた夜道、携帯のディスプレイは白すぎる。その光は、道の先を更に暗く見せていた。
携帯を閉じる。
返信は後にしようと思った。代わりに、閉じた携帯に尋ねた。
「なぁ、芝楽が人間恐怖症だったって……本当だと思うか？」
俺が触ろうとした時、青ざめてそれを避けた。しかし、自分から話しかけてきた。時々話が噛み合わない。だが話す態度はあまりに「

普通」で自然だ。
なんだか噛み合わない。
そんな簡単に治るモノなのか？大体、話す時と触れられそうになった時の温度差、あれは？話す態度は普通なのに、触れそうになった時は――「怖がっている」よりも、より危機感を感じているような気がした。もっと切羽詰まっていた。
「噛み合わないよなぁ……」

訊かなかったのは――訊けなかったのは、この質問が芝楽を疑うように取られたら嫌だったからだ。
それとも……俺は疑っているのか？芝楽が嘘をついていると、そう思っているのか？
もしそうなら、或いはそうでないなら。
どちらにせよ、サイ子にぶつけることもできなかった。

§

どうして私はここにいるのだろう。
昏い世界。閉ざされた扉。厳格にして厳粛な空気。
私がここにいる『理由』。それは、『神を喚ぶ』ため。だが、私は『神を喚ぶ』ことなど出来はしない。

『理由』が不可能であるならば、それは理由たり得ない。ならば。

どうして私はここにいるのだろう。

§

#03　嘘

「ぅあっつい！」

耐え切れずに吠えると、叫びは教室内にこだました。

「いーだーぁ、叫ぶと更に暑くなるぞー……」

指摘する声も力無い。

――気付けば、季節は夏を迎えていた。

サイ子を芝楽に初めて会わせた日から、二週間が過ぎた。初夏だ初夏だと思っていたら、ばっちり夏は到来していた。道理でやたらと暑いわけだ。

我が校は、公立高校の極寒たる懐から、どうにかこうにか捻って捩って搾り出した費用により、ようやくクーラーが各教室に設置された。当然の如く生徒は喜んだわけだ、が。

「安物買いの銭失い？」

「お前……ただの故障だって。来週には直るっってたじゃん」

つまるところ、故障して動かなくなったのだ。

クーラーの恩恵を享受したのちには、暑さは更に俺達に重苦しくのしかかっていた。

「鏡ちゃん、その髪見てるだけで暑苦しい……切りなよ」

「うーん……それは正論なんだが」

「括りなよ」

「ゴムが無い。サイ子貸して」

「あたしだって余分には持ってないわよ」

なんとなく襟足を伸ばしている髪は、中学の途中から定着し、今はそれ以上短くするのは不安になるくらいだった。だが、夏はやっぱり、暑い。

首筋にべったりと張り付いた髪の毛は、うっとおしい以外の何でもなかった。
「あつい……い」
せめてと机に突っ伏すが、机の表面は期待したほど冷たくはなかった。それでも起き上がる気力もなく、ぐったりと机に体を預ける。今週中には直らないと思うと、ますますげんなりした。
と、背後から高い声。
「いいだっ、ゴム貸してあげよっか？」
突っ伏したまま振り返ると、クラスの女子が三人。ああ、女子はスカートだから良いよね。でもなんで髪そんな長いのに結ばないんだろ……。
朦朧とした思考の後、ようやく言葉の意味を理解した。直ぐさま体を起こす。
「貸りる！」
ぱっと手を出すと、にこやかに「結んであげるよ」と言って近付いてくる。まぁ確かに髪を結んだことなど殆ど無いし、女子は髪を弄るのが好きだったりするからと思い素直に前を向いた。
「髪べたべたしてるでしょ」
「そんなコトないよぉー……出来たぁっ」
「お、さんきゅ」
女子が一歩下がる気配がして、首筋を風が撫でた。大分すっきりした。
「ありがとねー、帰りに返すわ」
笑ってそう言うと、女子たちはきゃいきゃい姦(かしま)しく笑いながら、どういたしましてとかわかったとか返した。
笑いかけると、たいていきゃいきゃい言われる。多分好意を持たれているのだろうが、きゃいきゃい笑っている女子の中で何人が本気で好意を持っているかと言えば、二人いるのかどうかといったところだろう。五月蝿い鳥が囀(さえず)るみたいに笑う女子は、みんな、真剣に好いてくれているわけではない。

それに不満があるわけでは全くないが、別に特別嬉しいとか恵まれてるとか思ったことはない。……笑顔を向けたら嫌がられるとかよりはマシだろうが。
だから、友達が「いいよなぁ、飯田は」と言うのが理解できないし、サイ子が「女子と仲良い」と目くじらを立てるのも不可解だ。
だから。
「サイ子ー、みてみて、結んでみた！」
「……ふぅーん、ヨカッタネ」
「なんで棒読みなのさ」
「別に？」
サイ子が不機嫌になるのも分からない。

＊

最後の授業が終わった時、俺はある重大なことに気が付いていた。
早急に手を打たなければならないことだ。何故こんなギリギリまで気付かなかったのかと自分に舌打ちしながら、教科担任に儀礼的一礼をしたあとで慌ててサイ子のものへと駆け寄った。
「ちょっと」
それだけ言って手首を掴み、廊下へ引っ張っていく。
「ちょ、ちょ、何？」
よく飲み込めていないらしいサイ子を廊下に出してから、教室から少し離れた。みんな帰りの支度をしているのだろう、教室からは誰も出てこない。それを良いことに、俺は重大な話を切り出した。
「サイ子、助けてくれ」
「何、何なの？一体何を？」
「お前にしか頼めないんだって」
状況が分からず慌てているサイ子の目をひたと見据え、俺は言った。
「教えてくれないか」
「……鏡ちゃん？何、を？」

慌てが収まったらしいサイ子は、どこか血の気がひいたような顔をしていた。薄々感づいているのだ。
「だから、その……――」

「本当に、汗べたべただけど…このまま返しちゃっていいのか？」
「いいよいいよ、気にしないでー」
言葉尻を奇妙に吊り上げて鷹揚に笑うその女子。髪の毛が多くて長いのに、結びもしていない彼女。そんな彼女に、俺は笑顔で言うのだ。
「サンキューな、『石川』！」

「信じられない、ほんとに」
帰りぎわ、サイ子は説教臭い口調で述べていた。
「真剣な顔して『あの人、名前何だっけ』だよ？まさか、一学期も終わるってのに……クラスの子の名前覚えてないなんてね！」
「ちがっ…名前は覚えた！顔も！ただそれらが一致しないだけだ！」
ああ、全然自慢げにいうことじゃないよ俺……。
「あーあ、可哀相な麗乃（つぐの）ちゃん。鏡ちゃんにアピールしてんのに覚えてもらえてなかっただなんてぇ」
わざとらしく長いため息に、むっときて言い返す。
「別にアピールなんかされてねぇし。石川は俺のこと好きでもなんでもないよ」
妙に真剣な物言いに驚いたのか、きょとんとした顔で見つめる。
「……そんな風に思ってたんだ？」
「意外？」
「うん……不愉快？」
「そんなことねぇよ。きゃいきゃい言う相手がいたほうが楽しいってのは分からなくもないし、本気じゃないってわかってる分、楽な

のかも」
不意に、足音が小さくなった。二つあった足音が一つに減ったのだと気付く。振り返ると、俯いたまま立ち止まっているサイ子がいた。細く色素の薄い髪は、今が夕焼け時ならきっとその日差しに溶けてしまっていただろう、と思う。
「……サイ子？」
聞こえてないのかと不安になる。それほど身動きがなかった。

「サイ子？」

もう一度呼ぶ。慎重に近付く。
慎重に？何故？早く駆け寄ればいいのに。それができないのは、それは――
ぱっと上がった顔は、明るい笑顔だった。
「ごめんごめん、コンタクトがズレちゃってさ」
「……っなんだよ、急に立ち止まるから驚いたろうが」
「ごめんってばー」
陽気に笑って謝る彼女は明るく楽しげで……なのに、どこか昏かった。
よく、太陽のように笑う、と言うけれど、今のサイ子は太陽は太陽でも、夕日のようだった。沈む直前。真っ暗闇になる直前に、作り物みたいな赤を纏った太陽。
「……サイ子？」
不安な声が出た。一瞬、この声も届かないんじゃないかと思った。
「鏡ちゃんは、さぁ。女の子が本気かそうじゃないか……分かるんだ？」
なんでもないような声。しかし、どこか張り詰めた空気。嫌な汗が伝った。
きりきり。

音がする。

「本気じゃないってことしか分かんないよ」

きりきり。
きりきり。

嫌な音。

切れる寸前の弦の声。

「そう……だよね。鏡ちゃん、告白されて驚いたりしてるしね。」
「まあ……。だって、本気だったら隠すだろ、こう、気付かれないように」
「……そう。隠すの。だから、鏡ちゃんは気付かない。……でもね、なんで隠すと思う？ううん、なんで隠してるのに結局告白するんだと思う？」

気付けば、いつの間にか嫌な音は止んでいた。
緩んだわけでもなく、ただ、静寂。

それはつまり。

「伝えたいからだよ。伝えるのはね、気付いてほしいからだよ。ねぇ、分かる？隠してても、本当は気付いてほしいんだよ？……鏡ちゃんは、違う？」

どきり、と脈の音が煩く鳴った。

「彼氏がいるの分かってて…分かってるから、黙ってた。隠してた。

気付かれないように……。　でもね、本当は違うんじゃない？本当は気付いてほしかったんじゃない？自分からは言えないからこそ……気付いて、応えてほしかったんじゃないの？」
脈拍が耳障りなほど煩く鳴っていた。まるで火事を告げる半鐘のようだ。

……気付いてほしくなかったなんて、そんなわけ、ない。

応えてほしかった。有り得ないと分かっていても、捨てられなくて、ただ見つめていた。

「見つめていられれば良いとか、傍にいられれば良いとか、友達でいられれば良いとか……全部、嘘。
そんなわけない。全部虚構。建前。偽善。そんなに人間、美しくないでしょ？
本当は、もっと自分を見てほしい、誰より近くにいてほしい。

友達なんて、そんなの、

……いやだよ……」

ぼろっと零れ落ちた、大粒の露。きらきら光る。動揺し狼狽する俺の傍らで、石の上の露をダイヤモンドに喩えた俳句が在ったなどと思い出す俺がいる。
無理だと分かっていて尚、諦めきれない。諦めた振りをして、心の中で「俺を見てくれ」と叫ぶ。
知ってる。その気持ちは、知っている。
でも、彼女の喉から溢れる言葉は、俺なんかよりもっとずっと切実で、強くて烈しかった。

「ねぇ、なんで気付かないの。気付かなくていい、気付かないで、なんて、全部嘘だよ。気付いてほしいよ。当たり前でしょ？

――ねぇ、気付いてよッ……！」

絞り出すような声とはこういうものかと戦慄する。か細く、儚く、けれど強靭な力。ぞっとするほど、必死な声だった。

彼女はそのまま片手で頬と眼を拭い、走り去った。声だけが耳に残って谺する。

その意味を、分かっていて必死に理解を拒んでいる俺が、そこにいた。

夏だというのに、流れゆく一筋の風は不思議と冷たい気がした。

＊＊＊＊

――――――――

to：サイ子

title：（no title）

とりあえず、

色んな話抜きで

芝楽の所に行きませんか。

今日の七時にあの場所へ

行きます。
来れたら来てほしい。
ーーーーーーーーーーー

「メール送信完了」の文字が、ディスプレイに浮かび上がる。それを、ぼけっと見つめていた。
今は午後五時半。あと一時間以上ある。それまで何をしようかと、暇を持て余し、結局携帯をいじくる。何も考えずにいると、メールの受信ボックスに辿り着いていた。過去の受信メールをぼんやりと流し読みしていく。不毛で非生産的な行為は、この世界の意義有る行為の全てを馬鹿にしているような気がした。
俺が今メールを送ったのはどうだろう。生産的な行為なのだろうか。意義があるのだろうか。……意味はある、と思う。ただ、意義があるかは分からない。そもそも、意味と意義の違いを知らなかった。

――学校帰り、サイ子が俺を置いて帰ってしまった、あの日。丁度上手い具合にとでも言うべきか、あれは金曜日のことだった。今はその二日後――つまり、日曜日。
学校で下手に顔を合わせる前に、一度二人で話すべきだとは思っていた。が、いざ話すとなると、何と言って呼び出せば良いのか、呼び出した後何を話せば良いのか分からなくなってしまったのである。そこで思い付いたのが、「芝楽のところに行く」だった。
多分、学校で会っても彼女は普段通り、何事もなかったかのように振る舞うだろうし、そうされたなら自分も何事もなかったかのように振る舞ってしまうだろうと思う。そうなったら、きっと今まで通りでいられるだろう。

……でもそれは、一瞬のこと。

今、ちゃんと掴んでおかないと――何を掴んでおくのか分からない

けれど――、取り返しがつかないような気がして、怖かった。
俺は、臆病者なのだろう。
臆病者でも構わない。失くしちゃいけないものを、失くしたくないと思えるなら。

ああ、だけど……失くしたくないものって、何だっけ？

前までは……古井に対する感情だった、と思う。だけれど、この間ギターをやめようとした――結果的にはやめなかったが――時に、それは捨てようと考えた。失くしたくないと思いながら、頭では捨てるしかないと考えていた。
今は、何を失くしたくない？
一番失くしたくないものは？
古井は関係無いことは、分かっていた。「友情」だとか、そんな簡単なものでもなかった。複雑で、よく見えない。

失くしたくないのは確かなのに、「それ」の存在は痛いくらい感じてるのに、何なのかわからない――それ、どういうことだよ、ホント。
「ああっもう、こういう時はぁー！」
わざと騒がしく立ち上がる。ギターケースをひっつかんで部屋を飛び出した。

＊

「……で、此処にいらしたのですか？」
頼られたのが嬉しいらしい顔をして、しかし少し呆れたような表情で、芝楽は俺に笑いかけた。俺も、さっきまで悩んでいたのが嘘のように晴れやかな笑顔を向けた。
「困った時の芝楽サンだろー？」

「いやいやいやいつからそんな肩書が」
「今付けた」
「思い切り即席じゃあないですかっ！」
盛大に突っ込んでから、額に指先を当てた大人びた仕草で息をついた。
「まぁ、古井さんのことは他の人に相談できませんしね」
やっぱり、変な所で大人っぽい。
「……っていうか、古井が関係あるのかもよく分からないんだけど。」
何を捕まえておきたいのかも。
何を悩んでいるのかも。
全て自分のことなのに、分からないことばかりで。
「もどかしい？」
心を読んだかのような一言に顔をあげると、それを合図にしたかのように、少女は俺の前にちょこんとしゃがみ込んだ。それは、座り込んだ俺と目線を合わせようとしてくれたのだろう。
俺を見つめている芝楽の眼を見つめる。
色んなものが見透かされているような気がしたけれど、芝楽なら嫌でもない、と思う。透き通った、茶色がかった瞳が綺麗だ。
今更だが、髪といい瞳といい肌といい、色素が薄いような気がする。それは生来のものというより、長い年月で色が抜けてしまったようにも見えた。もしくは色素を取り入れる前、つまりこれから黒くなる――そんな気もした。
「……もどかしい、ってんじゃない、と、思う。どっちかっていうと、情けないとかのが近いかも」
下手すれば弱音……いや、どう聞いても弱音以外の何物でもないそれを聞いて、しかし、芝楽は優しくにっこり微笑んで、言った。
「それじゃあ、一度きちんと整理してみましょうか。人に話すと意外と冷静に確認できるものですよ」
幼稚園の先生みたいだな、と思う。それじゃあ俺は幼稚園児か、と

考えて可笑しくなった。
「ぐちゃぐちゃでも構いませんから、貴方の頭や心を埋めているものを一つ一つ話して下さい。私、聞きますから。」
「うん……じゃあ、聞いてください。」
息を吸う。夏の夜の涼やかな空気が肺に触れた。時間を遡る。

「……まず、俺は、四月に古井に会って、結構すぐ好きになった。サイ子とは長い付き合いで、親友……みたいなものなのかな。でも、古井は彼氏がいて……二ヶ月悩んだけど、結局諦めることにした。……でも多分、諦めきれてないんだよなぁ。
それで、芝楽に会って、あと近頃サイ子の様子がおかしいなって思ってた。で、昨日、サイ子は俺が古井のこと好きだった……いや、今も好きなこと知ってて、その上でサイ子は……多分俺のこと、が、好きらしい……みたいなことを、言われた。サイ子に。
……で、それに何か言わなきゃって思って、とりあえずメールで呼び出したんだけど、何を言えば良いのか悩んで……そのうちこんぐらがってきて、芝楽に助けを求めに来た。」
とりあえず全て言ったが、整理された気もしない。だが、芝楽はそう思ってもいないようだった。
「ふむ……。つまり、鏡弥さんが悩んでいるのは、」
そこで「いち」と言いながら指を一本たてた。右手の人差し指だ。
「古井さんを諦めたいが、諦めきれていないこと。」
「に」の掛け声で二本目が立つ。ピースサイン。
「サイ子さんの気持ちを知ってしまったこと。」
クイズの答えを教えてもらうような気持ちで「さん」という言葉と共に三本目の指が立つのを見つめる。
「自分はサイ子さんをどう思っているのかということ。」
さて四本目はと構えていたところに、「以上三点です。」と締められてしまった。拍子抜けして、自分のことなのにも関わらず、つい
「え、それだけ？」

と訊いてしまった。芝楽はこくりと頷く。
「いや……俺はもっとさ、複雑な」
言いかけて、笑顔の芝楽にストップをかけられた。
「複雑に考えるから複雑に思えるんですよ。一人で考えると、突き詰めていくつもりがとんだ袋小路に迷い込むことが多々あるのです」
意外と言い返せない。確かに、とんだ袋小路に迷い込んだような感覚だった。
……しかし。
「でもさ、俺は……なんで俺は金曜日のことを放っておかないのか……放っておいちゃいけないと思ったのか、それが分かんないんだよ？自分のことなのに……。」
そう、だから、それが一番悩んでいることなのだ。そう……なんで放っておかないのか。何を掴んでいたくて……
また頭を抱えそうになった俺をして、芝楽はあっさりと言った。
「それは、三番目に帰着しますね」
「え？」
絡まった電気コードのようにぐちゃぐちゃの俺の思考を、ばっさりと切ってほどくような物言いだった。
「考えてみてください。貴方は、『何故サイ子さんの行動を放っておけないのか』という命題について悩んでいる。それはつまり、貴方がサイ子さんをどう思っているのかという命題に帰着するでしょう？」
……言われてみれば、確かにそうだ。
「そして、三つのことは一つに帰着します。それは――サイ子さんの言葉をどう受け止めたらいいか。それで悩んでいらっしゃるんでしょう？鏡弥さんは」
「……なんか、それってつまり、すごく単純な悩みだった……ってこと？」
若干……いや、普通に恥ずかしい。大人びているとはいえ明らかな年下に単純な悩みを持ち掛けてしまったわけである。蓋が開かない

と瓶を持って行ったら、回せば簡単に取れたと分かったときのような感覚だ。しかも中学生に……。「これ全然開かないんだぜ」「回せば開きますよ？」みたいな。……考えたら更にダメージが深くなった気がする。
「まぁ、バラバラの悩みが一つに纏まっただけで、まだ悩みは解決してないわけですし……その悩みは私もお手伝いできませんしねっ！ねっ！」
うおお、思いっきりフォローされてる……。優しさが痛い……。
「でも……」
急に変わった雰囲気に気を引かれ、顔を向ける。彼女は既に立ち上がって歩き始めていた。
そういえば、初めて会った日も歩き回っていた。歩きながら話すのが好きなのかもしれない。その様子は、妙に似合っていた。
「もしかしたら、じっくり悩めば良いのかもしれませんね」
「どういう意味？」
ふと気付いたが、もしかしたら俺、このコスプレイヤより頭が悪いかもしれない。
「いえ……貴方が来てすぐ仰った話では、告白というより、一時的に昂った感情をそのままぶつけてしまったような形でしょう？鏡弥さんのあまりの鈍さに、つい」
「一言多い。それは俺も今反省中だ」
「いえいえそんな……。」
何がいえいえなのか。
「ですから、きっと今頃サイ子さんは頭を抱えてると思います。」
そう言うが早いか、頭を抱えて苦い表情を作った。
「あんな言い方するつもりなかったのに！ずっと言わないつもりだったのに……とまぁ、こんな具合に」
あっさりと普通の表情に戻り、手を広げる。なんだその小芝居。
「言わないつもりだったのかなぁ……そりゃそうか」
理由を思いたって自分で呟く。サイ子は俺が古井を好きだと知って

いたのだから。
「サイ子さん、きっと貴方にどう思われたのか、すっごく気にしてます。発熱するんじゃないかってくらいに。……恋する女の子はね、可愛いんですよ」
うたのおねえさんみたいな顔で、芝楽はにこにこと笑った。
それを聞いてようやく普通の感覚が戻ってくる。そうじゃん……よく考えたら、サイ子っていつから俺のこと好きだったの？てか何処が好きなの？なんで？
「つーかぁ…考えたら恥ずかしくなってきた」
「あははっ、鏡弥さん顔赤いですよー？今何時です、サイ子さん来ちゃうんじゃないですか？」
芝楽の言葉にはっとして、携帯を取り出す。着信・新着メールなし。時間は六時四十八分だった。
「あーあーあと十分くらいで多分来る……っていうか、来るかな？」
「来ますよー。誘いを放置して平気でいられる人ではないですもの」
確かに。いやでも今のサイ子は興奮してるかもしれないから……いや、あれから会ってないけれど、もう二日経っている。落ち着いているに決まってるか。
「案外こう……飄々としてたりな」
「ありえなくもないですねぇ」
折角だし、サイ子が来るまでギターを弾こうと思った。ギターケースを開けて、そっと取り出す。立ち上がった。
とりあえず軽く音の確認をしようと思った時、芝楽が目の前で何かに蹴つまずいた。
一瞬、やっぱりこいつも中学生の女の子なんだなぁなんてよく分からないことを考えた、気がする。感じた、の方が近いか。本当に刹那のことだ。
それと同時に、反射的に手首を掴んで支えようと、手を伸ばした。

＊

「どうしたの？来てみたら、二人とも黙って…」
「サイ子！」
多分、俺は泣きそうな顔をしていた。
「鏡ちゃん？」
「サイ子、俺……」
金曜日のことなど、頭から吹き飛んでいた。ただサイ子に縋りたい気持ちだった。
「どうしよう、なんで、こんな、」
芝楽を見た。
正確には、その右手首を――いや、

『右手首があった場所』を。

隣でサイ子が息を呑んだ。
芝楽は黙っている。表情は見えなかった。視線は一点に釘付けになっていた。
俺は、芝楽の右手首を掴んだ――掴もうとした、自分の右手を見る。
そこには何も残されていなかった。

しかし、芝楽の手首から先は、石像のように砕け落ちていた。

「どう、いう…なんで、なんでこんな、触っただけで……人間の手が、砕け、てっ……！」
激しく狼狽した俺の肩を、サイ子の小さな手が支えた。それで、少しだけ安堵する。しかし、すぐにその手が震えているのに気がついた。それでも彼女は、毅然と言う。
「芝楽……その手は、どういうこと？」
ようやく手首から目を離し、芝楽の顔をみた。宵闇に溶け込みそうなほど、暗く悲しい顔をしていた。

「いつかは分かってしまうと思っていました……嘘はばれるって。ごめんなさい。」

芝楽の言葉一つ一つに頭を揺さぶられるような感覚を感じながら、俺の中の誰かが言った。
ああ、瞳が。やっぱり透き通るみたいな茶色をしてる。

「私、随分前に死んでいるんです。」

＃０４　私という存在

「死んでる……」

意味が分からず、鸚返しに呟いた。
死んでいる？誰が？……芝楽が？
「な……に、言ってるの？貴女、死んでいるって、そんな、」
「私が死んだのは、１８７０年……明治政府による統治が始まった頃です。政府が一世一元の制を打ち出し、年号を明治と改めてから三年目、つまり明治三年のことです。」
飽くまでも淡々と、早すぎも遅すぎもしない速度で語る。段々と頭の中で、芝楽の言葉が処理され始める。そこから垣間見える事実が信じられなくて、完全に諒解する前に急いでまくし立てた。
「ちょ、ちょ、待てよ！死んだ？いつ？…お前、いま生きてるじゃねぇか！」
「生きている人間の手が、こんな風に崩れたりしますか？崩れた先が跡形もなく消え去ったりしますか？」
無表情のまま彼女が持ち上げた右手は、石像のように砕けた切断面を境に、消えて無くなっていた。
――掴んだ、と思ったのは一瞬だった。コンマ一秒よりもずっと少

ない時間。……次の瞬間には俺は空気を掴んでいた。目が無かったら、掴み損ねた――掴んだと思ったのは気のせいだったと考えたろう。
しかし、そう考えなかったのは、彼女の手が、触れた瞬間さらりと乾いた砂のように崩れたのを見てしまったから。掴んだ手首から、触れていない指先まで何かになぞられたようになめらかに輪郭が曖昧になって、そうかと思ったらもう空気に溶けて、破片の一粒も残らなかった。
「それは……俺が触ったから、なのか？」
知りたくない、聞きたくない。
そうは思っても、やっぱり、と期待して。
やっぱり、違うんじゃ。
ただの思い込みなんじゃないか。
そんな期待をしてしまって。
……すぐ、後悔した。期待なんかするんじゃなかったと思った。
芝楽の表情が、生気のない無表情が、揺らいだ――悲しげに、揺らいだから。

「俺のせい、なんだな」

背筋が伸びた。
頼りなげな彼女の表情を見て、しっかりしなければと諒解した。
真っ直ぐに見つめると、所在なさげに視線をコンクリートに落としてから、伏し目がちのまま斜めに逸らした。
「……いつかは起こることでした。貴方には責任などありませんし、負い目を感じる必要もありません。これだけ長くいれば、避けられないことでした。責任は私にあります。こうなることを分かっていて、貴方に話しかけるべきではなかった。」
「なんでそんな、よそよそしい喋り方なんだよ」
「そんな……ことは」

「なんで目ェ逸らすの？」
「鏡ちゃん……」
斜め後ろにいたサイ子が、Tシャツの裾を小さく握った。
「なんで、そんな暗い顔してんの？芝楽ってさ、いっつもくるくる表情変わって、笑ったり慌てたり忙しないやつだなぁって思ってたんだよね、俺」
「鏡弥さん？何言って……」
「だからぁ、お前が死んだとか死んでるとか明治とかよくわかんねぇけど、話すんならもっと『らしく』話してくんねーかなっつってんの！」
なんだか言ってて元気が出てきた。自分の言葉に自分が励まされる感覚。そうじゃん、そうだよ、って納得する。
俺が徐々に自信を持っていくにつれ、芝楽は逆に目に見えて狼狽え始めた。「狼狽える」よりも「おろおろする」の方が似合うかもしれない。
「シリアスな話ならそれでも良いけど、悲しい顔なり真剣な顔なりして話せよ。ちゅーとはんぱに無表情で喋りやがって……お前誰だよ！？とか思うじゃねーか」
「でも、あの、分かってます？私、死んでるんですよ。人間じゃないんですよ？」
「はぁ？知るかよ。なんか右手も痛くはないみたいだしさぁ、初めて会ったときと変わったのってそこだけじゃん。いつ死んだとか知らないけど……お前はやっぱり『芝楽』だろ」
言ってやったとばかりに鼻を鳴らす。芝楽は泣きそうな顔をしていた。女の子の泣き顔はやっぱり嬉しくはないが、無表情よりはずっと『らしい』表情だった。
「で、でも、わたし、幽霊なんですよ？明治時代の人ですよ？」
「あああああっもうしつこいな！ほら……さっき言ったろ、失くしたくないものがどうとかなんとか……」
ついつい声が小さくなる。なんでこんなことまでこいつに言わなき

ゃならないんだ。しかもサイ子の前で。
全部芝楽が悪い。物分かり良いくせに今だけやたら意固地なこいつが悪いんだ。
「だからぁ…一番はよくわかんねぇけど……その中には、こういう……三人でいるのとか、芝楽のこととか、だから、そういうのも入ってるから……その……」
「鏡ちゃん、何言ってるの？」
サイ子、突っ込まないでクダサイ。そして芝楽、泣きそうなくせに今だけきょとんとすんな。
ああもう！

「だから！お前も俺の『失くしたくないもの』で、今更お前が何者だろうとそれは変わんねぇって言ってんだよ！」

は、恥、ず、か、し、い。

ああああ耳が！熱い！顔とか！恥ずい！
芝楽が悪い。全部芝楽が悪い。ああ涙滲んできそう。とりあえず全力で俯いた。
と、Tシャツを掴んでいた手が離れる。顔を向けると、真剣な顔のサイ子がいた。
「私も、鏡ちゃんと同じ意見かな。……芝楽さ、『話し掛けるべきではなかった』って言ったよね。それは、出会わなければ良かったってこと？」
漸く顔をあげると、やっぱり泣きそうな顔の芝楽がいた。だが、その顔はすごくへなちょこで、嬉しさがじんわりと滲んでいた。
「あたしは、芝楽に会えて良かった。友達になれて良かった。今そう思ってるし、多分この先もそれは変わらないと思うのよ。……だから、」
不意に、サイ子の声が震えた。

「あんまり悲しくなること言わないでよぉ……」
そうしてはらはらと泣き出す。
それを見た芝楽も、ついにぼろぼろと泣き出した。小さい子のようにしゃくり上げて、左手で顔を覆って泣いた。
「なんでえ……二人、とも、そんなに優しいんですかぁー！普通ユーレイとか、ひっ、怖いでしょーがぁー！それを……ひく、友達とかぁ……」
ぼろぼろと涙と言葉が零れていく。ああ、失くさずに済んだのだと安堵する。
「……あのさ、二人ともそろそろ泣き止んでもらえる？俺ね、流石に困ってるんですけど……女の子二人に大泣きされて」
「ああっ！ご、ごめんね！」
慌てて涙を止めようとするサイ子を見ながら、わざと触れなかった。芝楽に触れられないなら、二人共に触れないべきだと思った。別にそれは同情とか優しさとかじゃなく、きっとこういう時はこうするものなんだろうと思ったからだった。

「気が済んだか？」
「なんとか……」
涙目ながらすっきりした表情のサイ子と、まだ鼻をぐずぐず言わせながらも頼りない笑顔を見せている芝楽を見て、一旦コンクリートに座る。二人もすとんと座った。
その勢いついた様子を見て、ふと疑問が浮かぶ。
「地面は、触っても大丈夫なんだな」
「ええ、何故か。」
考えるように視線を宙空に漂わせたのち、俺達を見る。
「折角ですから……この百年余り私が考えていたことでも話しましょうか」
ひゃ、ひゃくねん？いや、単純計算しても約百四十年前に死んでるわけだ。

「聞きたい！」
「俺も聞きたい……が、その前に事実確認しとかないか？」
二人の視線が集まる。
ええと、と一瞬頭を整理した。
「お前は約百四十年前に亡くなった。今は幽霊……なんだよな？」
「その呼称が適切かは判断しかねますが、概ね正しいと私は思っています」
確かに、幽霊の定義なんてものはない。なんたって死んだ後にどうなるかなぞ皆知らないのだ。死んでからだって、自分のことしかわからない。他と比べようがないのだから、「幽霊ですか？」と訊かれても「そうなんじゃないかと思ってますがねぇ、実際のところはどうだか」なんて答えるしかないだろう。
「……んと、じゃあ人間恐怖症だったってのは嘘なんだな？触られない為の」
「そうですね。触られない為というより、長いこと人と話していなかったことと、恐らく常識にズレがあること、触られそうになったら必死で避けてしまうだろうことなんかをおかしく思われない為に、一番簡単な設定は人間不信かなと思ったんです。最初は今もーって通すつもりだったんですけど、性格的に人間不信の役は無理があると思ってこっそり言い換えました」
赤い目のまま悪戯っ子のように笑う。
「まぁ人間恐怖症ってのも十分おかしいと思ったけどなぁ……」
横文字が弱いのは、普通に明治の人間だからだろう。
「あとさ。たいてい此処にいるっていってたけど、もしかして行動可能範囲狭い？」
「ああー……私って地縛霊なんですかねー。動けなくはないんですけど、不思議と動きたくないんですよね」
自分で「地縛霊なんですかねー」って。まあ仕方ないけども。変な会話。
「それでも大体は覚えましたよ、太陽暦とか六十進法とか。結構箱

入り娘だったのでそもそも生前も世間に疎かったですから、慣れるのは苦じゃありませんでしたよ」
「日本の歴史とともに幽霊やってんだもんな、タイムスリップしたわけでもないし……ああ、ま、こんな場所に篭ってたら『タイムスリップ』とか分からなくても不思議じゃないけどね」
きょとんとした顔を見て、すぐにフォローを入れる。
「それで……ずっと此処から動かずに、百余年考えていたことって？」
サイ子が切り出した。芝楽は、いつものように笑って話し出した。
「私という存在についてです。」

＊

「死んでから、気付くとこんな幽霊だかみたいな状態になっていました。その時の驚きやら何やらは割愛しましょう。
色々と試した結果、無生物並びに植物はすり抜けるようです。動物は試したことがありませんが……砕けたりするのは人間だけのようですね」
「……無生物と生物で分かれるならともかく、植物も平気とは……なんというか、主観的な区分だな」
人間は、植物が自分たちと無生物とどちらに近いかと言ったら、無生物に近いイメージを持っていると思う。そういう意味で『主観的』だと思った。
「あと、飛んだりは……出来ないと思います。というか、宙に浮く方法がよく分からなくて。重力を受けてる感じはないんですけど……あ、でも何かに躓いて転ぶことはあります。怪我はしませんけど」
そういわれてみれば、さっきも転んでいた。だが、幽霊に重力……は、ないよなぁ。
「大体、どうしてすり抜けたり毀(こわ)れたりするのかしら……人間もす

り抜けられた方が自然な気がするけど」
「『何故人間に触れると、すり抜けるのではなく消えるのか』ですよね。それは私に、二つの考えがあります。
一つは、私のこの状態が『無生物並びに植物より確か』で『人間より朧』な存在であるという考え。人間より朧だから、人間に触れられると消えてしまう……。しかしすり抜けるというのも不思議です。それなら触れられるような気がしますからね。
だから、二つ目を考えました。それは『無生物並びに植物には感知されない』から。そして……『死んだ人間と生きている人間は相入れない』から。」
どきり、と心臓で嫌な音がした。
分かるような気がしてしまったからだ。そしてそれは、そのまま芝楽と俺たちに当て嵌まるからだった。
「それから、消えることについても考えがあります。…私が『人間に触れると消滅する』と知ったのは、結構最近です。二、三十年くらい前でしょうか」
最近って。俺ら産まれてねーよ。
「その時も、一人の男性がふらっと来たので、話し掛けてみました。……何を話したのか。どんな反応をされたのか。全て……全て忘れてしまいました。」
それは何故か。
分かる気がする。つまり……ショックが大きかった、ということなのだろう。
「覚えているのは……彼が触れた羽織りの裾が、ぼろっと崩れて……かと思ったら、空気に溶けるみたいに消えて無くなりました。その時、直感したのです――私自身も、この羽織りと同じだと」
一瞬眉が顰まる。その時の恐怖が思い出されたのだろう。
「羽織りは捨てました。そしたら案の定、手を離れた途端に崩れて消えました。中心――それが心臓なのか頭なのか分かりませんが――から切り離されると、形を保ってはいられないようです。そして、

それは手足でも例外ではない……先ほど、皮肉にもその考えが証明されたわけですね。」
「ちょ、ちょっと待てよ」
彼女の砕けた右手を見て、最後の言葉にきりりと痛みがはしる。
「触れたら砕けて、中心から切り離されても消えるんだろ？それって――」
言葉を飲み込む。怯えたようなサイ子の声が後を継いだ。
「――もし、中心に触れてしまったら？」
神妙な顔の芝楽は、遠くのコンクリートをねめつけながら、呟くように答えた。
「仮定が正しければ――
――私という存在が、消える」
ぞっとするような、不吉な悪寒が空間自体にはしった。芝楽の手首が儚く無情に、一瞬で消えていくのが蘇る。
恐ろしかった。

「じゃあ、また明日も来るね」
結局ギターを弾くことなく、帰ることとなった。
いつまでも手を振っている芝楽をもう一度振り返ってから、前に向き直る。
と、芝楽のもののような、
「…っと…く、そ…する……だっ…」
声。

振り向いたが、もう芝楽は闇に消えていた。

§

死んだ者と生きている者は相入れない。
それは自分が出した答。
分かっている。
……分かっている。

だから。

明日。

決意を固め、それと同時に言葉がまろび出る。
「もっと早く、そうするべきだった」
分かっていた。

――大丈夫、明日ならできる。

そう思った。

§

#05　告白と昔話

すっかり忘れていた課題は、たいてい眠りに落ちる直前に思い出す。
俺はいつも結局それらを思い出さなかったふりをして寝てしまうのだが、今回は思い出した途端に目が醒めた。

一つ。古井を諦めたいが、諦めきれていないこと。
二つ。サイ子の気持ちを知ってしまったこと。
三つ。俺はサイ子をどう思っているのかということ。

そもそも俺は、サイ子にある意味告白されたわけだ。いややっぱり、ちょっと違うかな……。偶然知ってしまった、の方が近い気がする。
それで、サイ子にまぁそう思われているとして。
俺は、

嬉しい？
迷惑？
ショック？

――俺は、サイ子のことは、多分とても好きだ。でも、それは恋愛感情とかではなくて、友達とか親友とかの括りになるはずだと思う。
だから、どう思ったかといえば、「困った」だろう。俺はサイ子と友達でいたいし、古井が好きだ。やっぱり好きだ。
だが、サイ子はそれをよしとしない。というか、それをやってきて、無理をしてずっと笑っていてくれた。それで、ついに箍（たが）が外れた。
これ以上は無理だった。
多分、サイ子は「友達でいよう」と言ったら頷いてくれる気がする。
ただ、それはサイ子にあまりに酷だ。あの叫びを聞いた後で、そん

なことを言うのは……あまりにも、あいつが報われない。

俺はわかっていたのかもしれない。

結局、このままではいられないことを。

このままでいようと努力していたのはあいつで、このままでいたいと甘えていたのは俺だった。

古井が好きだ。でもそれは、どうしたって叶わない。

サイ子とは友達でいたい。でもそれは、彼女に対する最大の甘えであり、彼女の思いに対する冒涜だ。

だから、俺には二択しかない。

サイ子の思いに応え、古井を諦めるか。

古井を想いつづけ、サイ子から離れるか。

応えられないのなら、友達でもいられない。俺たちは止まっていられない。サイ子に重い負担がかかることで保たれてきた微妙な均衡は、ついに崩れてしまったのだ。

――本当は、あの二択は間違っている。本当は、古井は関係無い。

俺は、サイ子の想いに応えたいのだろうか。応えられないのだろうか。

このままでは、いられないのだ。

＊

「おはよー、鏡ちゃん」

朗らかに笑いかけてくる彼女を見て、きりりと痛みがはしった。俺が古井を好きだと知っていて尚笑いかけるサイ子を思って、痛みがはしった。

「あぁサイ子、お早うー……」

「どうしたの鏡ちゃん。元気ないね、寝不足かい？」

「うん……課題がさ、終わらなくて」

「？…今日までの課題なんて……」
サイ子が言い切る前に、被さるようにして椅子を引く音がした。
「おはよ、あずさ」
「おぉ、おはよう古井」
長くてまっすぐな黒髪が揺れる。
「二人とも、おはよう。」
……声が硬い。
「なんか、怒ってない？古井」
「怒ってますとも」
「……あずさ、何かあったの？」
憤然とする古井に、恐る恐る尋ねる。と、刺々しい声が返ってきた。
「喧嘩した！」
誰と、は言わずもがな、である。
そんな会話で、決意が固まった。

帰りのＳＴの時、ざわついている教室で、隣に軽く声をかけた。
「古井、今日、時間ある？」
「え？あたし？陸奥（みちのく）と帰るつもりだけど……何か用事？」
「ちょっと。帰りの五分くらいで良いんだけど」
にっこり笑うと、彼女は少し驚いた顔をしてから、躊躇いがちに「五分でいいの？」と尋ねた。
俺は頷いて、それで話は終わった。
その時ふと視線を感じて後ろをむくと、斜め二つ後ろの女子――そう、ゴムを貸してくれた、石川麗乃（つぐの）と目が合った。が、すぐに逸れる。意図的に逸らされたような気もしたが、あまり気にしないことにした。そもそも目前の問題で頭がいっぱいだった。
ついて来て、と告げて、靴を変えて歩き出す。生徒がごった返すホームルーム棟の廊下を足早に抜けて、渡り廊下をわたった。途端、

人気がなくなる。屋根が無い為廊下から丸見えの渡りを後にして、特別教室棟に入った。更に進み、生物実験室の前まで来て、ようやく足を止めた。
此処は棟の端っこだから、殆ど誰も来ない。理科の先生がいる化学準備室や、サイエンス同好会の部室である物理実験室とは、階段の踊場を挟んで少し離れていた。それに、まだＳＴが終わったばかりなので、人は全くいなかった。
好都合だし、人が来る前にさっさと用件を済まそう。
「それで、何の用事？」
慎重な声。それで、思う。
「多分、察しはついてるかなぁとは思うんだけどさ」
これだけは。
ここだけは。
ずっと思ってきたことだった。今までどれだけ不様を晒しても、テンパったり挙動不審になったりしても。……ここだけは、格好つけたかった。

だから、

笑顔で。

「俺、古井が好きだよ」

少し驚いた顔をしていたけれど、それは俺の言葉の意味ではないのだろう。
「何処がどう好きかって聞かれたら、両手は無理かもだけど、片手くらいなら一瞬で言えるくらい、好きです。」
ちゃんと言えたのが嬉しくて、笑みが溢れる。それをとりあえずしまって、微笑みに変えて、ゆっくり続けた。

「古井に付き合ってる人がいるのは知ってるし、古井がその人のこと大好きなのも知ってる。でも、どうしても言いたいって思っちゃったんだよね」
彼女は困ったような、泣きそうな顔をしていた。
なんで古井が泣きそうなの。泣かないでくれよ、俺なんかの言葉で。
古井が黙っているので、こんこんと湧き出る言葉を紡いでいく。
「でもさ、古井には迷惑だったかもしんないけど、俺は古井を好きになれて良かったってすげぇ思ってる。今、すごい思う。なんか、変だけど……」
やっぱり、笑顔がこぼれた。
「ありがと、古井」
泣きそうな彼女は、一瞬俯いてから、勢いよく顔を上げて、かと思ったら、思いきり一礼した。
「ごめんなさい。」
そして、笑った。
「あと、あたしも……ありがとう、飯田」

陸奥を待たせているからと急ぐ古井に、自分はもう少し此処にいるからと手を振った。……一つ目の課題を片付けたのだ、と思いながら。
なんだかすっきりした。思っていたのとは全然違った。今にして思えば、最初の笑顔は緊張しすぎてかなりぎこちなかった。
しかし。ちゃんと、言えた。言いたかったこと全て言えた。やはり胸の奥底のあたりがキリリと痛んだけれど、それを含めて本当に気持ち良いと思えた。
一つ目の課題は、つまり、告白してしまえば済むものだった。…その勇気がなかっただけで。
サイ子の件は、結局告白の後押しとなったわけだ。自分の甘えを噛み締めたから、それくらいの勇気はだそうと思えた。

「よーし、帰るかぁー」
自分に一声かけて、歩き出そうとした時である。
「飯田…くん」
階段の陰から現れた人影は、よくよく見ると、
「あれ、……石川？」
石川麗乃。麗しいと書いて「ツグ」と読むのが珍しいと思った。
「どしたの、こんなとこで……」
言いつつ、さっきの問答は聞かれていたなと思い、心の中で舌を打つ。つけてきたのか？なんで？
「飯田くん、……あの、そのぉ……
あたしと、付き合ってください！」
ばっと髪が空を斬る音がして、彼女は頭を下げていた。
「え、……え？」
石川？って、あの、明らかに俺に恋愛感情持ってなさそうだった？あの？
「え、ちょ……」
意味が分からずに困っていると、彼女は顔を上げてくれた。今分かったことだが、頭下げられるのって安心しない。
「一年のときから好きだったんです。でもせっかく同じクラスになれたのに、、仲良くなろうと思っても、彩子ちゃんがいるし、一緒に帰ってるから、付き合ってるのかなぁって思ってて……でも、古井さんに告白したってコトは、付き合ってる人いないんだよね？」
お、おおちょっと待って。そんなに前から？え、じゃあやっぱり本気？
大して本気で好きでもなさそうだったのは演技だったのだろうか。なんで？
「えと、いないですけど……」
とりあえず疑問形だったので答えるが、まだ頭は回転中だった。
「じゃあ、付き合ってください！」
脳がようやく回転を止める。思考を終了したのだ。

とにかく、石川は俺が好きで、付き合いたいと申し出ているわけだ。
石川には申し訳ないが、いつものパターンなわけだ。
「ごめんなさい、付き合えません」
「……なんで？」
ああ、怒ってる。泣き出す人や微笑んでくれる人、がっくりしながら帰る人。様々な女性に対してきたが、断られて怒る人は……ぶっちゃけると、始末が悪い。
「いや、俺あんまり石川のこと知らないし……」
「別に付き合ってからでも分かるよ。今、振られたんだから好きな人もいないんでしょ？」
威圧的だ。怖いです。キレても男は手に入んないよ！
しかも、断りの口上は幾つも使ってきたが、振られ現場を捕らえて現行犯逮捕ならぬ現行犯告白されたのは初めてである。よって、返す言葉が思いつかない。
「良いじゃない、断る理由なんてないでしょ！？」
無いこたないが。断られてキレている時点で断られる理由を自ずから作っていることにどうして誰も気付かないのだろう。
「いや、その……」
言葉を濁すと、更に煽ってしまったのか、頬が少し赤い。
「何よ、あたしじゃどうして駄目なのよ！古井さんなんて無愛想だし地味だし……いつも一緒にいる彩子ちゃんは可愛いけど……でも、あたしと二人、どう違うのよ！あたしの方が……」
ぐっ、と口をつぐんだのは、俺があからさまに嫌な顔をしたからだろう。
つい、眉間に皺をよせたままため息をついた。
「……あのさぁ。古井がどうって、悪いけど、それただの主観だと思うよ？それから」
ここまでは、良い。サイ子がまるで可愛くないとか言ってきたやつも過去に幾人かいるし、確かに石川はかなり一般ウケする方向で――つまり派手で、顔もなかなか可愛いとは思う。だから、そこまで

いらついてはいない。
問題は、もう一つの方だった。
今までは深く考えなかったけれど、今は違う。聞き逃せない、と思ってしまった。
「サイ子とアンタが同じだって？あいつと、アンタが？」
嫌悪感を露にしたせいだろう、流石に泣きそうな顔を見せた。
本当なら自分に好意を寄せてくれた女の子を泣かすなんてしたくない。だが今、俺は怒っていた。
「アンタがサイ子の何を知ってるって？古井のことは俺もそんなに知ってるわけじゃない。でも、サイ子がどんだけ我慢して、我慢してくれてたかなら、知ってる。アンタはさ、知ってんの？その上で、同じだって言ってんの？」
俺は知ってる。
違う……思い知った。
あいつがどんだけ耐えて、我慢して、嫌な思いして、そのなかで笑ってけれていたのを知った。だから。
だから、聞き逃せなかった。
石川は泣きそうだった。目許には水が溜まってきている。
多分、言われるまで気付けなかった自分に対する憤りだった。……
ああ、これじゃあ八つ当たりだ。だが、訂正するつもりはないし、やはり彼女の言葉は許せなかった。だから、少しだけ八つ当たりになってしまったことにだけ、
「ごめん」
ひとこと言って、立ち去った。

＊＊＊＊

「鏡弥さん、不細工ですよ？」
笑って言うのを、眉間の皺もそのままに言葉を返す。
「ぶすくれてんだよ、大きなお世話っ」
芝楽は不思議そうな顔をして、サイ子に話を振る。
「なんでしょうねぇ、鏡弥さん」
「うっさいなぁ。自己嫌悪だよ、じ・こ・け・ん・お！」
何と答えたものかと困り顔のサイ子を一瞥し、組んだ両手に視線を戻してから、届くように呟いた。
「古井は関係ないからな」
「え」
俺が古井を呼び出したのを見ていたろう、言葉こそ短く謙虚であったが、ありありと「え、違うの？」という心情が見えた。
「なんつーか……」
二人をちらりと見ると、四つの眼睛（がんせい）が俺を捕らえていた。慌てて目を逸らす。
「ちゃんと言ってフラれて来ましたよ」
一応断っておくが、言いたくて言ってるわけでは決して、ない。ただ、サイ子には言っておこうと思った。というか……知りたいだろうし、隠すことでもない、ただ向こうからは訊きづらいだろうからという理由だ。
「でもそれは関係なーいの」
ほっとしたような、しかし傷ついたような顔をしているのだろう。見なくても容易に想像がついた。だから、意識して軽く言った。
「じゃあ、自己嫌悪中の鏡弥さんに良いことを教えてあげましょう」
やはりうたのおねえさんみたいに、にっこり笑って歌うように言う。
「……なんだよ？」
芝楽は俺のすぐ前にいる。斜め後ろの彼女には分からないように、

視線だけでサイ子を示した。
「考えて出る答えっていうのは、本当はもう分かってることなんですよ」
サイ子のことだ、と気付き、どきりとした。変になりそうな声を落ち着けて、平静を装う。
「芝楽、お前それ……自己嫌悪カンケーなくねぇ？」
と、搾り出すような声が響く。

「……きょ、ぉちゃん」
「サイ子？」
俯き気味のサイ子は、眉根を寄せたまま困ったような顔で続けた。
「あのね……その、金曜日は申し訳ありませんでした」
「え、そんな」「それで！」
言いかけた俺を押しのけて、一瞬だけボリュームを上げる。
「ムシが良いんだけど……無かったことにしてほしいの。無理なことはわかってるけど……ちゃんと、自分でけりはつけるつもり」
無かったことにって、と言いかけて、口を噤む。
「無かったことって言うか、待っててほしいの。あたしがけりつけるまで。」
その直線的な視線を射かけられ、ああサイ子だ、と思った。こっくりと頷く。
「分かった」
サイ子の言う通り、無かったことになど出来ない。ただ、待つというのはつまり、あれを「告白」と受け止めないでほしいということなのだろう。端からそのつもりは無かったから、異存はない。
と、そこでぽつりと声が落ちた。
「けりをつけるつもり、……ですか」
二人同時に、声の主を顧みる。無意識に零れたのか、振り返った俺達を見てびっくりしていた。

「あの……いえ、立派だなぁ、と。」
「芝楽の方が、立派だわ」
堂々と、逆に自慢するようにサイ子が言うのを、気恥ずかしいような困ったような顔で見る。
「有り難うございます。でも……貴女の様にけりをつけられず、うやむやのまま逃げてしまう人も、いますから」
「……どういうこと？何の話？」
芝楽のその何処か侮蔑的で吐き捨てる様な口調が、ぐっと刻まれた眉間の皺が、何より厭な物を見るような――しかし、哀しげな――透き通った茶混じりの瞳が珍しく、気になった。
顔を覗きこむと、はっとした様に頭をぴくりと揺らし、四、五回素早く瞬いた。一連の動作は小動物のようだ。
「まぁ……その話は兎に角。鏡弥さん」
詳しい話を聞けると思っていたところにいきなり名前を呼ばれたので、体ごとびくついた。
「えっ、な、何？」
驚いた俺を見て、大人びた優しい笑みを浮かべる。年月を見た気がした。
「今日はギターを持っていらしてないのですね？」
ああそのことかと、今更ながら思い至る。
「うん、ちょっと……。話が大きく戻るんだけどさ、今日俺は四月からの宿題を済ませたわけよ。」
わざと回りくどい言い方を選んでみたが、二人には通じているようだ。直接的な言い方はあまりしたくない話題であるので、有り難い。
「だから、丁度良いかなって思ったんだ。
……元々、二年になったらギターは休もうと思ってたんだ。ただ、色々あって結局続けちまってた。芝楽って聴き手がいるわけだし、弾いてもいいかなって……。
でも、そうすると此処に来る以外にも家で練習するわけだし……そろそろ受験のこと考えなきゃいけないのになぁって、周りの話

聞きながら思ってたわけ。だから、半永久的に辞めるつもりだったりもしたけど……まぁそれはともかく、どっかで一旦止めなきゃいけないとはずっと思ってたんだ。
　だから、これを機にさ、受験が終わるまで封印しようと思って。それに……何て言うか、ほら、折角だからたくさん話したいじゃんか」
最後の言葉に少しだけ恥ずかしくなって、照れ隠しに笑う。
空気が柔らかな熱を持った気がした。
「じゃあ、何話す？」
優しく笑ったサイ子は、俺と芝楽を交互に見る。
「あたしは、芝楽のさっきの話を聞きたいなぁ」
「あ、俺も！」
小学校の頃の様に、指先を空に突き刺す。太陽は既に落ち、少しずつ夜に転じようとしていた。
「さっき、って、あの立派だって言ったことですか？でも、話すと長いですし……良いんですか？本当に長いですよ？」
困り顔の芝楽に、二人でこっくりと頷いた。詳しい話を目でせがむ。ちらと隣を見ると、やはりサイ子も同じ目をしていた。
先程の表情から見ても、かなり昔の――しかも恐らくは生前の話であろうことは察しがついた。だからこそ、幾ら長くなろうとも聞きたかった。
そんな俺達を見て、観念したのか溜息をつくと、
「……わかりましたよ。では、」
とても……とても穏やかに、語り出した。
「昔の話をしましょうか」
§
明治に入る前のことです。

時は動乱の時代・幕末。
日本を変えんと、老いも若きも志を持った者供が国中に犇(ひし)めいていたころに、一人の女が娘子を出産しました。
女の姓は”雪童子(ゆきどうじ)”――”緋雪神社(あけゆき)”という神社の神主家でありました。神道の中でも、地域的にはそこそこに名のある一族でもあります。
雪童子の家は巫女の力が特に優れていると言われ、よって女系家族でした。
その頃は、女の母が雪童子家の頭首であり、女が次期頭首と決まっておりました。更には女には既にの五つ娘と二つの息子がおり、その娘がいずれ頭首になると決まっておりました。
しかし、次女を身篭ると、その次女について占っていた頭首が、このような神託を賜ったのです。

銀ノ華　地ニ降リル
咲カス花　大輪　薫ル香　芳シ
神ヨリ賜リシ　神喚ブ聲(コエ)
偉大ニシテ　尊崇スベシ

銀の華とは、雪のこと。つまり雪童子の者を指す。地に降りる、つまり生まれる。そして「尊崇すべし」。
この神託を賜り、頭首は「次女は偉大な霊力を持つ者である」として、長女を差し置いて頭首候補としました。緋雪神社における巫女の中でも特に力が強いとされていたのが頭首でしたから、信じぬ者はおりませんでした。
それからというもの、次女は強大な力を持つ者として、歴代の巫女の中でも一番と言って過言でないほど、厳しい巫女修業を受けて育ちました。基本的に日々を神殿で過ごし、世間というものを知らず……ただただ社の中だけで、穢れが付くからという理由で頭首以外の人間とは殆ど顔を合わせずに過ごしておりました。

しかし、娘はやはり娘でありましたから、外の世界というものに憧れておりました。時に姉や兄から聞かされる話に眼を輝かせており、ついにある時、具合が悪いと嘘をついて寝間には身代わりの兄を据え、姉と社を抜け出しました。
それがまた上手くいってしまった為、娘は時々務めを休み、姉や兄の協力のもとに外界へ遊びに出掛けたのです。
恐らく、頭首も次期頭首も気付いてはいたのでしょうが、黙認していた。あまりに閉鎖的な教育に、必要なこととはいえ、同情していたのでしょう。
しかし、この外出によって、娘は一人の男を見初めることとなります。見世物屋の青年で、それ自体はとても他愛ないことで、しかし、引き起こされた事態はとても重大でした。

そうして一歳また一歳と過ぎ、流れ流れ、時、１８６７年。将軍家によって、大政奉還と王政復古の大号令が発されました。後の時代から見れば、あれが「時代」の節目だったのでしょう。翌６８年から一年余り、新政府軍と旧幕府軍の壮絶な戦い……後の戊辰戦争が続きました。
その戦火が依然各地で上がる最中、新政府は「神仏判然令」――つまり、神仏分離令を打ち出し、国をあげて神道を信仰しようと定めた。それが後の廃仏棄釈に直接繋がってくるのですが……。
兎に角、そうして「神道こそが正しい」という考えが浸透します。
しかし、――これは私の考えですが――幕末から維新直後にかけての明治政府誕生の経緯に、戦闘と戦争が多くあった為、将軍家が自らその権威を朝廷にお返ししたとは言っていても、誰もが武力による革命と感じていたからでしょうか……儀礼を重んじる旧(ふる)い宗教、すなわち仏教・儒教・神道など――それらは「既に時代遅れである」という風潮が生まれ始めていました。

「神道こそ正しい」という思想。

「神道なぞ時代遅れ」という風潮。

その相反する、正に矛盾した流れが、あの時代――即ち明治初期には、確かに存在していたのです。

雪童子の末娘、齢十三。

数多の神官一族にとっては非常に微妙で、尚且つ重要な時期でありました。

明治初期は、時代の節目と言うよりも、時代の”裂け目”でした。

――戦争の傷痕が各地に、そして各人に深く残ったまま、異国から突如流れ込んできた文化。馴染みのない制度。二百六十余年続いた幕府の崩壊。新政府への期待と不安。大変な混乱の中、神官一族にとって正の思想――即ち政府側の思想に乗れるか。はたまた負の風潮――即ち民衆の風潮に押し流されるか。有力な雪童子の一族としても、それは例外ではなかったようです。

幸い……というべきなのか、雪童子は偉大な霊力を持つとされる娘を擁しておりました故、彼女を柱に神道の力を見せつけ、一族の安泰を図ろうとしました。

……このような背景のもと、娘は今まで以上に厳しく、厳格な指導に基づく巫女修業が課されたのです。無論抜け出すことなど不可能。……いえ、物理的には可能だったのかもしれませんが、一族の存亡が彼女の小さな双肩にかかっている今、抜け出すことなど、娘の姉や兄も含め、誰もが考えなかったでしょう。

そう……いるとすれば。

娘、一人。

――巫女という存在の仕事は多岐にわたりますが、基本的には祭事の取り仕切り、祈祷、神託が主です。その中でも力の有無が顕著に

顕れるのが、神託です。
娘に求められたのは、それでした。
神の聲を聞く。
神を喚ぶ。
色々な言い方があれど、つまりは預言者としての力でした。
しかし。
６８年――つまり明治元年に打ち出された神仏判然令を受け、一心に身を神に捧げたのでしょうが、一年、また一年過ぎても、彼女には神の聲は聞こえてきませんでした。
結局のところ、彼女には「神を喚ぶ」力など、ありはしなかったのでしょう。

そして、もう一つ。
彼女は、かつて見初めた相手が、忘れられずにいたのです。
彼女は――どうしても、会いたかった。会って話がしたかった。一度でいい、一度でいいから。そうすれば、断ち切れるから。
神仏判然令から二年。彼女は決心していました。
それは確かに逃げであったし、甘えであったし、私欲によるものでありました。しかし、しかし、決して、一族を、家族を想っていなかったわけではないのです。

彼女は、とある空白んだ頃に、神社を抜け出しました。そうして、あの若者に会いに行きました。
幸い見世物屋は場所を変えておらず、また会うことが……いえ、『目にすることが』できました。
何故……何故あんなにも、恋しいと思ったのでしょうか。それは今でも分かりません。しかし……確かに、私はあの眼が、欲しくて堪らなかったのです。

彼を見て、決心がつきました。
そして、１８７０年の初秋――私は橋から落ちて自殺しました。
§

#06　掴んだ手を（前書き）

最後なので少し長いです。

#06　掴んだ手を

自殺。

ぱさり、と大きな枯れ葉が落ちるような。大きいけれど、軽い。そんな音のような、言い方だった。

「ああ……」

声につられて隣を見ると、悲しげなサイ子がいた。

「……気付いてたのか」

力無く首を振り。否定、か。

「もしかしたら、って……それだけ。私たちよりも年下の姿、なら、と」

ああ、そうだ。

こんな若い頃に亡くなったならば、病気か他殺か……自殺しかない。俺は、こんな話を聞くつもりではなかった。もっと、ただの思い出話か何かを考えていた。でも……聞きたくなかった、とは思わない。

「あの……、芝ら…あ、いや……」

本名で呼ぶべきだろうか。しかし、……思い返してみても、彼女は苗字以外誰の名も語らなかった。

「芝楽と呼んでください。こんがらがってしまいますからね」

にこりと笑った彼女の顔は、何とは無く淋しそうだった。

それで、諒解した。

彼女は本当に自身の名を忘れたのだろうか？初めに言っていたように。否、ここまで過去の記憶が鮮明であって、そんなものを忘れる

とは到底思えない。それはつまり、わざと隠したということだろう。
それは何故か、と訊くつもりだった。
しかし、彼女の言葉を聞いて、諒解した。彼女は、『雪童子の自殺した巫女』ではなく『芝楽』でいたかった。……多分、そういう意味だろう。話の中でも名を伏せたのも同じ理由。
衝撃的な話だったけれど、彼女が『芝楽』という位置、もしくは立場、或いは『芝楽』としての彼女の記憶・経験を大事に思ってくれているのが分かって、小さく嬉しいと思った。

――と。

「今日、何をするつもりなの？」

和らいだ気がした空気の中、緊迫した声が一筋走る。
隣を振り返ると、芝楽を見つめた鋭利な瞳があった。
「ねぇ芝楽、何を……」
「何のことだよ、サイ子」
思わず尋ねるが、答えはない。鋭い視線はちらりとも揺らがずに、対象を見つめ続けていた。
「……昔の話……もとからするつもりだったんでしょう？違う？」
「なぁサイ子、話は俺たちが頼んだからしたんであって……」
「ううん、芝楽は最初から、今日この話をするつもりだった。そうでしょう？」
漸く俺を振り返ったサイ子は、すぐ芝楽に向き直り、焦るように質問を重ねた。
「昔の話をして……それで、何をするつもりなの。ねぇ、貴女、まさか……」
惑うような足取りでふらふらと詰め寄るサイ子を、芝楽は避けようともしない。その顔には笑みすら浮かんでいて、その笑みは――

「――！！」

心臓が叫ぶ。
恐怖に似た感情。
咄嗟に、目の前の手を引っ張る。
力無く歩いていたせいか、サイ子は勢いよく俺にぶつかった。
「鏡ちゃん……」
乱暴な手つきであったが、それを諌めようともしない。放心状態から我に返ったような顔。俺の心臓はまだ煩く鳴っていた。
「芝楽……今、なんで避けなかった。お前……消えちまうだろ、触られたら」
笑みは消えない。
「なんで笑ってんだよ、そんな……諦めたような顔っていうか、悟ったような顔っていうか……」
ぞっとした。
消える、と瞬間的に思った。

「それなの？」

ぽつり、と言葉が落ちる。
自分がまだサイ子の手首をしっかりと掴んでいることに気付いた。
慌てて離す。
「それって、どういう」
「消えるつもりなの？」

毅然と言い放ったようで、しかし、泣き出しそうな顔をしていた。

「今日……消えるつもりなのね、芝楽」

＊

「いやはや、サイ子さんは考える鋭くて参りますねぇ」
へらっと笑う芝楽を注視する。
「じゃあ、お前、本当に消えるつもりなのかッ？なんで？」
「なんでって……ユーレイがいつまでも現世に居たらおかしいでしょう？」
「そんなことないッ！」「そんなことねぇよ！」
サイ子と声が被る。芝楽が、本当に可笑しそうにくすりと笑った。
「つか……大体さ、今までウン百年留まり続けてきたんだから、今更だろ」
「百数十年だから…何百年じゃない……」
ぽそりと呟くサイ子の声は聞こえなかったことにする。
「とっとにかく、なんで今になってそんなこと言うんだよ。せっかく、せっかく、会えたのに……なんで今……」
言葉にすると込み上げてくるものがあって、涙が滲みそうになる。
慌てて口を紡ぐと、芝楽がすぐ側に寄ってきて、にっこり笑った。
「鏡弥さんは可愛いですねぇ」
「はッ？」
「そんな可愛さに免じて、教えて差し上げましょう」
秘密をこっそり教えるような、悪戯っぽい光。双眸に宿っていたそれが、不意に消えた。ぽつり、穴をあける様な声。
「私はね、きっと誰かに聞いてほしかったのですよ」
口許から笑みが消え、力無い真顔にいつの間にか変わっていた。そ

れで漸く先程の笑みが強がりだったのだと気付いた。
「私は……あの閉塞的な生から逃げたかった。重苦しい期待から逃れたかった。自身の無力をこれ以上識りたくなかった。」
言葉が強くなっていく。
「自由になりたかった。
苦しかった。
辛かった。
いつまで続くか知れない、拘束された人生が怖かった。
もうどうでも良かった。
期待に応えられない自身が憎かった。
私を閉じ込める母が憎かった。
私を身代わりに自由な姉が。
私を可愛がってくれたのに、修業が厳しくなった途端会いに来なくなった兄が。
出鱈目な預言をした祖母が。
助けてくれず頑張れとしか言わない父が。
私を束縛する雪童子の家が。
私の声に答えてくれない神が。

……ああ……

みんな、憎かった。

嫌いだった。」

「味方なんていなかった。
頑張るのが当たり前だった。
家の為、神社の為。
みんな私を『巫女』として見た。

尊ばれ、丁重に扱われ、畏怖された。」

「でも、私は巫女の力なんて無かったのよ。巫女じゃなかった、最初から……私はただの『女の子』だった！でも誰も気付いてくれなかったの、誰も！ねぇどうして？

……知っていたわ、みんな私に縋ってた。預言にある『巫女サマ』に。危うい現実なんて見たくなかった。だからみんな私を神聖なものとして、畏怖すべき巫女として奉り上げて……それで安堵したのよ。

あそこには『私』なんていなかった！ただの預言の『巫女サマ』！誰も『私』なんか見てなかった。逃避、責任のなすりつけ。でも良心の呵責なんてなかったでしょうよ、だって神聖なる『巫女サマ』だもの！」

あははっ、と渇いた笑い声があがる。

同時に上げた顔から、小さな真珠たちがとぶ。

それらは芝楽から離れた途端に風に溶けて消えていった。

あは、ははは、ははっ、と愉しそうに笑う彼女の頬を、熔けた金剛石（ダイヤモンド）が伝う。零れると同時に毀れる。

どうしてこんな時、頬を濡らすそれを拭うことすら出来ないのだろう。

笑い声が小さくなっていく。伝う金剛石の雨は増える。

「ははは っ、はは、は……ぁ……あぁ……」

音もなく崩れ落ちた。膝をつく。

左手と、崩れた右手首を顔に押し当てて、自分の息の根を止めようと足掻くように、声を殺して泣いた。

「うあ…あぁあ…ぁ……」

息の詰まる泣き声を聴きながら、俺とサイ子は立ち尽くす。いつの間にか闇に染まった空に、声は吸い込まれて消えていく。

この嘆きは、現在のものだろうか。
それとも、百数十年前の？
あの星の光が数百年前のものであるのと同じように。
吐き出せる場所（じだい）までずっと歩いてきたのかもしれない。
闇の中を旅して地球に辿り着いた光と同じように。

芝楽の声が小さくなっていく。震えていた肩も、落ち着いた。

「でも、ね」

零れた声は大人びても神聖でもなく、普通の女の子のものだった。
声だけは、彼女を離れても風に消えたりしないことが救いだと、不意に思った。
「少しだけ……少しだけ、家族を想っていたのよ」
先程とは違う、躊躇うような色を帯びた声。ぽつり、ぽつりと呟くように。
「私には…巫女の素質などなかった。家族を救う力など。けれど、何度そう言っても聞いては貰えなかった。ただの弱音と取られた。そして相も変わらず私を神聖視した。
……もたないと、思ったの。私がいたら縋ってしまう。本当はね、切り札なんてなくてもやっていけた筈。でも、楽な道を選んでしまったの、彼ら……いえ、私たちは」

ゆっくりと言葉を繋ぐ。それは、心の奥に潜んだ言葉たちを追いかけるよう。
「他に方法が無かったとは思わない。けれど、私が消えることが一番確かで、早くて簡単な気がしたの。」
だから、出した結論には後悔はしていない。そう言った。
「自殺が……？」
サイ子の呟くような声に、顔をあげる。赤い目を細めて弱々しく笑った。
「人は皆生まれた意味を持つとするなら、私の生まれた意味はあの自殺にあった。あのまま生き永らえていたら、私の生まれた意味など何処にもなかったと思う。」
分からない、と呟いた俺に、分からなくてもいいの、と言った。
「ただ、人生に後悔が全くないわけじゃない……」
切って、真顔に戻る。
「死ぬ前に、伝えてしまえば良かった。好きですと一言、言えば良かった」
そして、ゆっくりと立ち上がった。左手で自分を抱くようにして、呟くような小さな声で――しかし、強い口調で宣(のたま)った。

「短い一生だったけれど……」
小さな恋。
ただの一目惚れ。
叶うどころか伝えられもしなかった。
けれどもちっぽけなそれが、百数十年支えになった。

「私は恋をした。それが私の誇りなのよ」

＊

「誰かに聞いてほしかった……私は、私の為だけに死を選んだわけではなかったのだと。それが果たされた今、私が此処にいる必要はなくなった。」

必要、なんて。

声が嗄れたように、出ない。

言葉が返せなかった。

多分、何処かで俺は芝楽の言葉に納得してしまっていたのだろう。

「未練がある人は、皆こうして現世に留まるのかしら。それとも私が特別だった？……分からないけれど、きっと、歪んでいるのだろうと思いました」

この世は生者の世界。死者が留まるなど、世の理から外れたこと。

ましてや死者と生者が関わりを持つなどと。

「自殺し、次に目覚めた時は随分見慣れぬ景色がそこにありました。場所も時代も、少しばかりずれていたのです。」

どれだけ流されたのか。確かめる方法もないわけではなかったろうが、結局確かめることはしなかった。

「知るのが怖かった、というのも勿論あります。が、知ってどうなるものでもない……死んだ身に、今更どうすることも出来ないのですから、知る意味などありません。願わくば、母たちの力で雪童子の家がまた安泰になっていますように、と……ただそれだけ」

本当は、知りたいとも思ったのだ。

彼女の表情を見て、そう思った。

「だから、もう本当に全て、お終い。もう、いかなければ」

透き通るような焦茶の瞳が、優しく笑いかけた。

「さて！」
「うわっ！……いきなりでかい声出すなよな！こう、しんみり来てる時に！」
「あ、すいません」
その謝り方があまりにもいつも通りの芝楽で、笑ってしまう。今生の別れだというのに軽いものだ。
「実はですねぇ、非常に申し訳ないのですが、鏡弥さんに手伝っていただきたいのですよ」
「へ、俺？」
思わず自分を指差して間抜けな声を出してしまった。
今更一体俺に何をしろと。
「ちょ、お経とかは読めないぞ俺！」
あれ、お経は仏教だっけ？
「いえいえ誰にでも出来ることですから」
そう言う芝楽は、なんとなくちらちらと視線を動かし、せわしない。
「それって、あたしじゃ駄目なこと？」
誰にでも、に反応したのだろう。サイ子の言葉には、困ったような笑顔で答えた。
「うーん……サイ子さんでも十分嬉しいんですが……我が儘を言わせていただくと、鏡弥さんの方が適任、というか」
なんとも歯切れが悪い。ここはざっくり訊くいてしまった方がいいのかもしれない。
「で、俺は何をすれば良い？」
直球で訊くと、びっくりするくらい身を引いて、これでもかというほど狼狽を示した。芝楽にしてはかなり珍しいことだ。
「んー……と、二つ、先に言っておかなければいけませんね。」
またピースサイン。いや、本人はピースサインなんて知らないだろうけど。芝楽と二人で話した時のことが思い出された。随分前な気

がするが、考えてみれば昨日のことだ。……うわ、近ッ！
「まず、人に触れると、私の体は崩れます。分断されると、片方が全て崩れる。推測するに、体の中心から離れている方が崩れます。私のこの状態が、依然話した通り『思念』に依り形成されているとすれば」

「ちょちょちょ、ちょっと待った！『思念』って何の話？聞いてないんだけど」

慌てて遮る俺に、「話してませんでしたか？」とあっさり言ってのける。
「何かに躓いて転んだりすることや、空中に浮かべたり出来ないことっていうのは、私が私の思念で形成されているからではないかと思うのです。私の思念で出来ているから、ある程度は生前と同じ常識が生きるのではないか、という推測です。特に空を飛ぶなんて、体験したことがありませんからねぇ。歩いている時に足元に石があったら『躓く』という常識が咄嗟に働くのでしょう。
　つまり、『私自身』に関しては私の常識が通じますが、『私以外』――例えば人、植物と関わる時は私の常識は通じない。例えば『草は手折れる』なんて常識は通用しません。だから石に躓いて植物をすり抜けるのではないでしょうか。無生物をすり抜けるのは……多分、植物をすり抜けた体験があったからでしょうね」
「ふーむ……」
ちょっと分かりづらいが、昨日の説明と併せてみれば確かに通る。気がする。
「じゃあ、話を戻しましょうか。
　ええと、もし今の仮定が正しいとしましょう。すると、私自身には私の常識がある程度通用します。では、私の『中心』とは何処か？……心臓、と答えたいところですけれど、胸部だけ残る姿はちょっと想像できません。ですから、恐らくは頭――頭部です。」

つまり。
頭部に触れてしまえば全て毀れて消えてしまうのだ。
「頭部が損傷した状態で残るのも考え辛いですし、頭部に少しでも触れられれば全て消えると考えて間違いないかと思います。
　それから……これはただの楽観なのですが、親より先に逝ったとはいえ一応私も神に仕えし身でありました。砕けて消えるのは……成仏、ではないかと思うのです。」
……芝楽が俺に頼もうとしているのは、つまり？
「これが知っておいてほしい一つ目。二つ目は……」
と、急に歯切れが悪くなった。もごもごと聞き取り辛く、しかも「あのぅ……ええと」と口ごもっている。
口が重くなるのは今し方したばかりの話題の方ではないだろうか……。何だろう、今の以上に嫌な話題？

しかし、彼女の顔を見て、分かった。
大分呆れる。

「おい芝楽、早くしろ」
「ああっ御無体なっ」
キャラ変わってんぞ。
「ええーと、ですねぇー」
「芝楽。」
「はいっ！その……鏡弥さんって、少しだけ……少しだけなんですけどね、見た目がですね……」
うん、これは。

「わ、私の好きな人に似てるんですよぉ」
うわァーやっぱりィー。

「そっそれに、そのひと『恭一』さんって言って……『キョウ』繋がりだなぁって」
「えええー……なんかこう、すごい断りたい」
「なんでですか！」
「だってこう……オンナノコオンナノコした芝楽って地味に気持ち悪いんだもの」
「ひ、ひどいこと言いますね」
私本当に傷つきましたみたいな顔をして涙を拭うふりをする。
「いやぁ……でも、えもいわれぬ縁を感じるね、鏡ちゃんと恭一さんなんて」
恭一という人は、週に一度集まって見世をやる、一種の劇団みたいなものの一員だったらしい。曲芸やらをやって、町を活気づけていたのだろう。その見世に稀に現れる若い娘を、その娘の瞳の色は透き通るような焦茶だということを、彼は知っていたのだろうか。
「……あっ！」
「どしたの鏡ちゃん」
「芝楽さぁ、好きな色とかある？」
きょとん、とした顔で俺を見てから、一瞬の間を置いて答えた。
「紅（くれない）。……白と違って、生きているって思う色だから」
そうなんだ、と相槌をうつと、サイ子が突っ込んで訊いてくる。下手くそながらに躱していると、漸く諦めた。
それを見て笑っていた芝楽が、一つ、息をついた。
「……言い置くべき言葉は尽くしました。お願いです、鏡弥さん」
芝楽の声は、静かで、明瞭で、大人びていて、幼くて、遠くて、近かった。
「一度だけ、抱きしめてもらえませんか」

それは、掴んだ手を離すこと。

――出会いには別れがあると言うけれど、ならばどうして出会うのかと思っていたことがある。
中二だかなんだかで、そういう『定説』とか『決まり文句』みたいなのに意味もなく反感を抱いていたころ。
結局試験だ受験だとうやむやになって忘れて、思い出しもしなくなった。その程度にしか関心がなかったということかもしれないし、諾々と受け入れることに慣れたせいかもしれない。
今、それが分かった……なんて言うつもりはない。
やっぱり今でも、寧ろより一層分からなくなってしまった。

でも。

出会いとは全てが全て自発ではないし、別れとは全てが全て強制ではないらしい。
例えば、運命と呼ばれるもの。奇跡と呼ばれるもの。必然と呼ばれるもの。偶然と呼ばれるもの。定めと呼ばれるもの。意志と呼ばれるもの。
出会いも別れもそれらの発露であり、発生であるのかもしれない。

一歩、踏み出す。
遠くで車の音がした。
ふと、芝楽の声がした。
そういえば、Ｊ－ＰＯＰ向きの歌声だった。あれから一度も歌わせていない。一曲くらい覚えさせてやろうと思ったのに。
「…死後目覚めたとき、私は生前の『私』ではなくなったのだと思

いました。『私』は死んだ。なら、ここにいる私は誰だろう――そう思った時、答えは『ただの人』でした。人ですらないのかもしれなかったけれど、個人ではなく名前の無い不定のものとなってしまったと思った。誰にとっても私人ではない。それが一番……怖かった。

だから貴方が『芝楽』と名付けてくれて、あなたたちが『芝楽』と呼んでくれて、私は『芝楽』になった。

「だから……ありがとう」

笑顔を見つめながら、その小さな頭を包むようにして、そっとだきよせてみた。

気付けば、そこには夜の闇。

何も掴めなかった自分の掌だけが俺を見つめていた。

＊

「帰ろうか」

ぽつりと呟いた声は、するりと空に滑っていった。

「ああ」

帰り道へと歩き出す。サイ子は俺の顔を一瞥したが、黙って隣を歩いた。

「……」

「なんだよ」

「……じゃあ言うけどね？前に鏡ちゃん、『女子二人に泣かれると困る』とか言ったじゃない」
「……覚えてないな」
「嘘」
切り返しが早過ぎないかい、前野木さん。
「でもね、男子一人に泣かれてもやっぱり困ることには困ると思うんだよね」
「……何の話かわからんが」
「なら別にいいけど」
「……」
歩きながら、俺を見上げる。
「ねぇ鏡ちゃん」
「なんだよ」
声が。
俺も、こいつも。

「あたし、鏡ちゃんのことが好き」

「……。」
「中一でさぁ、初めて会ったじゃない。二学期だかに同じ班になって、あたしのこと『サイ子』呼ばわりしたでしょ」
覚えてる。ものすご怒鳴られたから。
「モテるからって人のこと馬鹿にしてんのかと思ったけど、違った。鏡ちゃん、よく見たらかなり抜けてるよね」
かなり……ではないよ？残念ながら『サイ子』は素で間違えたが。
「多分、そこら辺から好きだった」
それは知らなかった。
自然、足が止まる。向き合った。

「……あたしと付き合ってもらえますか、飯田くん」

「……」
細くて色素の薄い髪。触れたら溶けてしまいそうなほど。
「……俺な、石川に告られた。」
目を見開く。瞳は、濃い、黒。
「断ったんだけど。……なんかこう、石川ってぜってぇ俺のこと本気で好きじゃないと思ってた。見た目、本気じゃない女子と変わんねぇの」
俺の声が吸い込まれていく。黒は色んなものを吸い込んでいく。
「あと、俺、多分まだ古井のこと若干好きなんだよね、一応諦めたんだけどさ。時間かけないとかなーって。昨日まで好きだったけど諦めたから今日からは普通ですなんて、出来なくて」
夜空と同じ色。
「だから……」
口が重くなったのを見てか、堪えられなくなったように呟いて去ろうとする。
「そうだね、ごめ」
「こ、こんなんで良かったら付き合ってください！」
「……は？」

振り返ったサイ子は、心底理解出来ないという顔をしていた。
「えーと……やっぱり駄目ですかね」
「ば……」
「ば…？」

「馬　鹿　じ　ゃ　な　い　の　！？」

「ひぃっ」
やっぱり怒られた……！
「もう本当、馬鹿じゃないの馬鹿じゃないの馬っ鹿じゃないの！？」
「ごっごめんなさい！」
「馬鹿！あーもう馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿ったら馬鹿！」
こ、こんな夜に騒いだら近所迷惑ですよ？
「ほんっとに馬鹿だ、あんた馬鹿だ！馬鹿馬鹿馬鹿！馬鹿！」
「そ、そんなに言わなくても……いたっ！たたたたかないでください！」
ばしばしと地味にバイオレンスな音が夜の道路に響いた後、漸くそれがやんだ。
と。
背中に重み。と、腹に腕。
「ささささサイ子ッ？」
背中が微かな振動を感じた。

「いーよ」

「え」

じんわりと背中があったかくなる。人の体温は同じくらいなはずなのに、人に触れると温かく感じるのはどうしてだろう。

「鏡ちゃんは女心に鈍いしあずさがまだ気にはなる。それでも、あたしを手放したくないって思ってくれたんなら、それでいいよ」

本当、なんで全部伝わるんだろう。いや、なんで全部分かるんだろう。俺は何にも分からなかったのに。

結局、考えたところで「一番失くしたくないもの」「一番大切なもの」は分からなかった。ただ、とりあえず訊いてみた。

――何を失くしたくない？

拍子抜けだが、答えがあまりにもはっきり返ってきたのだから、仕方ない。

ようやく背中から離れて歩きだす。

「大体さぁ、鏡ちゃんはへたれなんだよ」

「いきなり説経ですか……」

「だって鏡ちゃんはモテるけど、みんなこんなにへたれだなんてしらないでしょ？詐欺だよね、詐欺」

「べっつに、俺はへたれじゃないなんて言ったことは……つか！実際俺へたれじゃないし！」

肩を竦めて笑う仕種はあからさまに馬鹿にしている。

「とにかく、そのヴィジュアルでその性格はもう詐欺だよ」

なんて失礼な。褒めてるのか貶しているのか……というか、普通に貶してるよねそれ。落ち込んで良いですか。

「だからさ、鏡ちゃんの性格もちゃんと知っててずっと一緒にいよ

うなんて女の子いないんじゃないの？」
「……いくらなんでも『いない』は酷くないか？」
「じゃあ訂正。そんな子、あたしくらいしかいないんじゃないの？」
思わずサイ子に顔を向けるが、飄々としているようで、しかし顔が見えない。
「あー……かもね」
速度は変わらない。つかの間の沈黙が落ちた。再び足を止めたのは俺の方だった。
「……そうだ、なぁなぁサイ子、ちょっといい？」
「へ？」
ひょいと手首を掴んで軽く引くと、彼女は逆らわずにくるりとこちらに不思議そうな顔を向けた。
恐ろしい妄想を振り払う為と、乱暴にだきよせた。
「はわっ」
「うわっ、変な声」
「うううるさいな！鏡ちゃんがいきなり……引っ張るからでしょうが！」

あの星は、一体何年前の光だろう。もしかしたら、今はもう消えてしまった星の光なのだろうか。
星の放つ光を目で捉えることは出来ても、どうしたって星に触れることなど出来はしない。

だから、

せめて触れることが出来るものくらいは、掴んだ手を離さないでいたいと思うのだ。

腕の中のそれは、触れても消えてなくなったりはしなかった。

#06　掴んだ手を（後書き）

これにて本編終了ですが、一応エピローグも用意してあったりします。
全体のあとがきはそちらに。
補足説明としては、

飯田と鳥喰（いりはみ）は友人で鳥喰と陸奥は仲の良い友達ですが、
本文中にある通り飯田と陸奥に直接の面識はなく、
お互いに共通の友達がいることも知りません。

飯田、サイ子、古井、陸奥、鳥喰は陸奥と飯田がお互いを知らないだけで
あとはみんな友人だったりします。
（ていうか一回名前だけ出てきた鳥喰を覚えている人はいるのだろうか…）

epilogue

「うわっ、数学忘れたッ！」
昼休み残り五分。馬鹿みたいな雑談に、一緒になって、花を咲かすというよりも雑草を生やしていた友人・鳥喰廉理（いりはみゆきたか）が、予鈴を聞いて突然叫んだ。
「はぁ？……ユキ、おま、数学だけは忘れ物チェックしてんのに……器用に数学だけ忘れんでも」
呆れて笑ったが、やつは慌てて聞いていない。

――と、一瞬悪寒がした。

「あ、あれー……？」
嫌な予感。慌てて自分の席に戻り、鞄を覗く。
「……つぁッ！あああ俺も忘れたぁッ！」
昨日珍しくも宿題なんてやるから！やらなきゃ良かったよ畜生！
「なぁーんだぁー、陸奥も仲間じゃーん」
妙に言葉を伸ばして話してくる。くう、ムカつく。
「とにかく隣行くぞ、ユキちゃん」
「ユキちゃん言うな！」

ばたばたと隣のクラスに無断で入る。他クラスの教室って入りづらい、が、今はそれどころじゃないから気にしない。
「ワタぁー、数学の教科書貸して！持ってんだろ置き勉マスター！」
中学からの友人であり、尚且つ中学どころか小学校からの置き勉マスターこと渡瀬秋仁（わたせあきひと）は眠そうな顔を持ち上げ、文句も言わずに立ち上がる。真っ直ぐロッカーに向かうあたり、やはり置き勉していたのだろうが、これはもしやこのクラスは今日は数学ないか？
渡瀬は取られてしまったので、仕方なくもう一つの「アテ」を探す。

確かこのクラスだったはず――
「あ、いた」
「何、陸奥（みちのく）は古井さんに借りるの？」
既にミッション・コンプリートの鳥喰は余裕顔で俺の視線を追う。
教室の後ろの方に、三人で話している集団。その中の一人が古井あずさだった。
「んー、でもあいつ置き勉派じゃないから無いかも……」
一応訊いて、駄目なら置き勉してそうな奴を紹介してもらおう、等と打算的なことを考えていた、が。
「……あれ」
古井と話しているのは、一組の男女。それは別に良い。余談かもしれないが、俺は嫉妬とかやきもちとかとは少しばかり縁遠い人間ではないかと自己分析したのは小六の頃。それは高二の今も変わらない。
じゃあ何故逡巡したか？
――話している男子が、やたらめったらイケメンだったからだ。
「どしたの陸奥」
「ちょ、イケメン無理……俺地味系だからなんかイケメンって苦手なんだ！しかもメッシュ入れてるし！話しかけずれぇー！」
「あー分かるわー。目立つ人種って話しかけれないよなっ…て、あれ？飯田ぁ？」
「飯田？」
驚いたといえばその後だ。
鳥喰は、目立つ人種が苦手と言ったそばから、普通に「飯田ぁー」と話しかけに行った。
「ちょ、ユキ？」
慌てて後を追う。
「お、廉理久しぶり！」
明らかに地味系男子と明らかに目立つ系男子が普通に話してるのって、こう、若干違和感あるなぁ。

「どしたの？」
素朴な疑問に、親指を背中へ……というか背中にいる俺へ向けた。
「こいつの付き添い」
ちょっと待てコラ。何言っちゃってんのキミ。お前も同類だろうが。
「あれ、陸奥」
「あ、陸奥だ」
「え、陸奥？」
み、陸奥陸奥連呼しないでクダサイ。というか全員で見るなよ！
今気付いたが、もう一人の女子は前野木彩子（まえのぎあやこ）だった。
「えと、こいつ飯田鏡弥（いいだきょうや）。中二ん時のクラスメート。」
にこにこしているイケメンを指して紹介する。一応軽く会釈した。
「で、こっちは陸奥宗馬（そうま）。中三と今年同じクラス。」
「へー、宗馬って名前なんだ」
いかにも良い奴オーラを放ちながらそう言うのを聞き、引っ掛かる。
「あれ、なんで俺の苗字知ってんの？」
「え、だってあずさの彼氏さんだし」
あずさ？って……あ、なるほど、ソースは古井か。
「ああ……ってぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」
「な、なななんだよ！びっくりしたな！」
「あ、いや……ごめんごめん」
いやいやいや！え、ちょ、なんで名前呼び！しかも呼び捨て！『あずさ』って！
……てか、あれ？飯田って、前に「なんで付き合ってんの」的発言した奴じゃないの？もっとこう……軽そうな！女好きそうな！大してかっこよくもない自意識過剰野郎かと思ってたのに……イケメンだよ？しかも良い奴っぽいよ？！
「陸奥……」
鳥喰は哀れむような笑みを湛えて、あっさり言った。
「飯田はさ、男女問わず友達は名前で呼ぶっつー変なとこあって」
「男女問わず、友達『は』？」

そこにいる全員がこくこくと頷く。
「あー……そうなんだ」
心の内でこっそり息をついた。古井を狙われたら、流石にこのイケメン相手には勝ち目がない。
「えーと……」
白けさせてしまった気がする。自分が騒いだのが原因な分、罪悪感を感じる。何か、何か話題は――
「……赤、好きなの？」
「え？……あ、これ？」
一瞬きょとんとしたが、すぐに心得た様子で自分の前髪の一房を摘みあげた。
前髪の向かって右あたりに、幾筋か暗めの赤が走っている。それがやたら似合うのだが。
「うーん、紅色（くれない）なんだけど……皆赤っていうんだよなぁ」
顔を綻ばせる彼を見るに、外したかと思ったが、困ったような言葉は照れ隠しらしい。
「なんかね、一週間くらい前に入れたんだよ。赤メッシュだから先生に目ェつけられそうだよねって話してたの」
古井が補足を入れる。
「私が飯田の友達認定されたのもその頃だよね」
「友達認定？」
「名前で呼び始めたってこと」
何か関連があるのかと驚いて飯田を見たが、鷹揚に笑って
「それとこれとは全然関係ないんだけどねー」
と言った。
いまいち釈然としない俺を無視して、間抜けな音が響いた。
「やっべ、本鈴！……ってあああッ教科書ぉぉぉ！古井！教科書！数学！」
「え、持ってない」
やっぱりね！

諦めかけたところで、目の前に数学の教科書が。

「へ」

「俺の使う？」

顔を上げると、爽やかに笑った飯田がいたきゅ、救世主！

「借りる！」

思わず引ったくるように奪って、拝みつつ走り出した。

「サンキュ！じゃあ！」

「渡瀬もじゃあなー」

挨拶もそこそこに、教室を飛び出した。

ｅｐｉｌｏｇｕｅ（後書き）

知音、完結です。
元々は鳥喰が主人公の話の番外編的なものとして書いたのですが、
思ったよりも長くなってしまい、且つ本編の方が全く進まないということで
主人公（仮）が完全なる脇役になってしまいました。

ここまで読んでくださって、ありがとうございました！
コメ等いただけると励みになります＾＾（↑ねだんな
そのうち、また別の話を書き始める予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4247k/

知音

2010年10月11日02時58分発行